

田原本町文化財調査報告書第1集

多遺跡発掘調査報告

——第7・8次調査——

1985

田原本町教育委員会

田原本町文化財調査報告書第1集

多遺跡発掘調査報告

——第7・8次調査——

1985

田原本町教育委員会

序

奈良盆地の中央部に位置する田原本町は今なお多くの水田を残す田園都市であります。本町には米づくりが開始された時代の著名な唐古・鍵遺跡や同様の農耕集落跡が数多く存在するところでもあります。ここに報告します多遺跡もその一つであり、近年、調査が進み、遺跡の実態が明らかにされつつあります。

今回の調査は多遺跡の南方部の地区でありました。

この調査でムラの南端部の様相が判明したことは誠に意義深いものであります。本書に示した調査の成果が、幾分なりと活用いただければ、幸いに存じます。しかしながら、まだまだ、不備不足点があるかと思えます。御批判、御教示を賜われれば幸甚です。

調査を実施するにあたり、奈良県教育委員会文化財保存課、並びに奈良日精株式会社・土地所有者等関係各位の御厚意と御協力に対し厚く感謝を申し上げる次第であります。

昭和60年3月

田原本町教育委員会

教育長 岩井光男

例 言

1. 本書は田原本町教育委員会が実施した奈良県磯城郡田原本町大字多所在の多遺跡の第7次・第8次発掘調査報告である。
2. 調査は田原本町教育委員会が担当し、第7次調査は昭和59年8月20日から同年9月7日まで、第8次調査は昭和59年9月21日から同年9月25日まで実施した。現地調査は藤田三郎があたった。
3. 第7次調査にあたっては、奈良日精株式会社代表取締役社長、辻花栄蔵氏より多大な御理解と御協力を賜わった。
4. 第8次調査にあたっては、土地所有者松田至功氏より多大な御理解と御協力を賜わった。
5. 調査補助員として、桑原久男(京都大学文学部)、加田隆志(奈良大学文学部)の学生諸氏が参加した。
6. 出土した遺物の整理作業には、浜崎悟・桑原久男・高善雄・吉井英夫(京都大学文学部)、加田隆志・前川浩一(奈良大学文学部)、豊岡卓之・塚田良道(同志社大学大学院)の学生諸氏の協力を得た。
7. 出土石器の石材、河道の砂礫種の分析、土器の胎土(岩石種)分析にあたっては、奥田尚氏(刑部小学校教諭・橿原考古学研究所研究嘱託)にお願いし、執筆して頂いた。
8. 本書の執筆は第2章の土器胎土の砂礫観察、石器の岩石種、第4章の自然河道跡の砂礫を奥田氏が、第2章の石器の観察を塚田氏が、他については藤田が執筆をおこなった。
9. 本書をまとめるにあたって、橿原考古学研究所・石野博信、佐々木好直、関川尚功諸氏より多大な御教授を賜わった。記して感謝の意を表します。
10. 本書の編集は藤田がおこなった。

目 次

本 文

序 文	
例 言	
第 1 章 多遺跡の位置と環境	
第 1 節 多遺跡の位置と環境	1
第 2 節 多遺跡の既調査の概要	4
第 2 章 多遺跡第 7 次調査の成果	
第 1 節 調査の契機とその至る経過	8
第 2 節 調査の成果	
1. 遺 構	
(1). 層 序	9
(2). 遺 構	10
2. 遺 物	
(1). 土 器	
1. 各遺構出土土器	12
2. 土器胎土の砂礫観察	19
(2). 石 器	
1. 石器の観察	27
2. 石器の岩石種	30
第 3 節 第 7 次調査のまとめ	
1. 遺 構	32
2. 遺 物	
(1). 土器について	32
(2). 石庖丁について	33
第 3 章 多遺跡第 8 次調査の成果	
第 1 節 調査の契機と経過	34
第 2 節 調査の成果	
1. 層 序	34
2. 遺構と遺物	35

第3節 第8次調査のまとめ	36
第4章 自然河道跡の砂礫	37
第5章 総括	40

挿図目次

第1図 多遺跡の位置	1
第2図 多遺跡周辺の遺跡分布図	2
第3図 多遺跡の既調査地位置図	5
第4図 飛鳥川採集土器実測図及び拓影	6
第5図 第7次調査トレンチ配置図	9
第6図 第7次調査検出遺構平面図及び土層断面図	
第7図 SD-02溝 遺構平面図及び土層断面図	11
第8図 SD-02溝 黒色粘土層土器出土状況平面及び見とおし図	11
第9図 SD-02溝 暗茶褐色土層土器出土状況平面及び見とおし図	12
第10図 SD-02溝 出土土器1	13
第11図 SD-02溝 出土土器2	14
第12図 SD-02溝 出土土器3	15
第13図 落ち込み状遺構出土土器	16
第14図 SK-02土坑 出土土器	16
第15図 各遺構出土土器拓影1	17
第16図 各遺構出土土器拓影2	18
第17図 包含層出土土器	18
第18図 石器実測図1	28
第19図 石器実測図2	29
第20図 第Ⅲ層出土土器	34
第21図 第8次調査検出遺構平面図及び土層断面図	35

表 目 次

第1表	多遺跡周辺の遺跡地名表	3
第2表	多遺跡調査一覧表	5
第3表	ピット一覧表	12
第4表	第7次調査における器種と類型	21
第5表	表採資料の器種と類型	21
第6表	第7次調査における土器の胎土観察表	22・23
第7表	表採資料の胎土観察表	24
第8表	石器観察表	29
第9表	石材観察表	31
第10表	ピット一覧表	36
第11表	砂礫の粒度分布表	37
第12表	自然河道の粒土及び礫種一覧表	38
土器観察表		
	第7次調査の土器観察表	41
	飛鳥川採集土器の観察表	49

図 版 目 次

図版1	多遺跡全景 (航空写真・西方から)
図版2	第7次調査 遺構 a. 遺構検出状況 b. SD-02溝 完掘状況
図版3	第7次調査 遺構 a. SD-02溝 遺物出土状況 b. SD-02溝 壺出土状況
図版4	第7次調査 遺構 a. 遺構完掘状況 西から b. トレンチ西半ピット完掘状況
図版5	第7次調査 遺構 a. SD-01溝 完掘状況 b. 落ち込み状遺構 完掘状況
図版6	第7次調査 遺物 (土器) a. SD-02溝 出土壺(1・2・3・4・5・6) S=1/2 b. 壺口縁部(27), 壺胴部文様(28~43) S=1/2
図版7	第7次調査 遺物 (土器) SD-02溝 出土土器(20・22・23), 落ち込み状遺構出 土壺(25) S=1/2

- 図版8 第7次調査 遺物(土器) a. SD-02溝 出土壺S=1/2 b. 甕(16・17・44・45・46・47・49・50・51・52)壺(26)鉢(21) S=1/2
- 図版9 第7次調査 遺物(土器) SD-02溝 出土甕(14・15・18) S=1/2
- 図版10 第7次調査 遺物(土器) a. 壺・甕底部及び甕蓋S=1/2 b. 包含層出土土器S=1/2
- 図版11 第7次調査 遺物(土器) SD-01溝 出土壺(72), 包含層出土壺(73), SD-02溝 出土甕, 及び各種文様・調整
- 図版12 第7次調査 遺物(石器) a. 石庖丁(11~13), 同未成品(14・15), 同剝片(16), 石斧(17), 剝片(18) S=1/2 b. 打製石器 削器(1), 楔形石器の削片(2・3), 石核(4), 剝片(5~10) S=1/2
- 図版13 第8次調査 遺構 a. 遺構検出状況 b. 遺構完掘状況 c. SK-01, 02完掘状況
- 図版14 飛鳥川採集遺物(土器) a. 弥生土器(1・2・14・15・16・17・18), 土師器(6・7・8・9) b. 土師器(3・4・5・10), 須恵器(11・12・13)

第 1 章 多遺跡の位置と環境

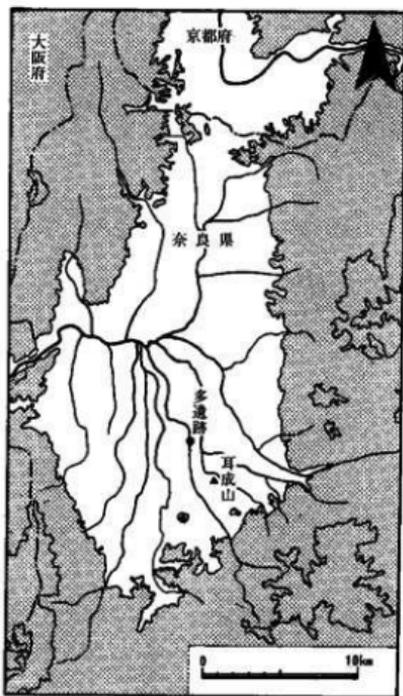
第 1 節 多遺跡の位置と環境

多遺跡は奈良県磯城郡田原本町大字多に所在する弥生から古墳時代にかけての複合集落跡である。本遺跡は奈良盆地のほぼ中央部に位置し、周囲の山々を見わたせ、特に三輪山は真東にその山容を見ることができる。盆地南半は高田川・葛城川・曾我川・飛鳥川・寺川等の諸河川が北流し、大和川となるが、その飛鳥川沿いに立地しているのが多遺跡である。現在は飛鳥川沿いの標高50m～52mの沖積地に立地しており、この付近の等高線は南東から北西方向に緩傾斜している。この等高線からも古くは飛鳥川が北流していたのではなく、北西方向に流路をとっていたと考えられる。そして、後に多遺跡上を流れ、遺跡を分断したものと考えられる。

遺跡の周辺は条里制を留める水田地が広がっているが、所々に自然堤防のなごりと思われる所に畑地が存在している。国道から離れている為、開発の波は遅い。

多遺跡の所在する田原本町南部から橿原市北部にかけては多数の遺物散布地が濃密に分布している地域である。しかし、発掘調査がおこなわれているものは少なく、それらの実態は不明なものが多い。このような状況の中で明らかな遺跡を中心に記述を進めていきたい。

縄文時代の遺跡としてはこの地域では現在のところ発見されていない。しかし、矢部遺跡(5)では縄文後期の土器片、佐味遺跡(4)や^①阪手遺跡(8)でも縄文土器の破片が出土しており、近いうちにこの付近においてこの時期の遺構が検出される可能性も考えられるようになってきた。縄文時代に続く弥生時代になると多遺跡をはじめ、点々と遺跡の存在をうかがえるようになってくる。多遺跡^①は



第 1 図 多遺跡の位置

第1表 多遺跡周辺の遺跡地名表

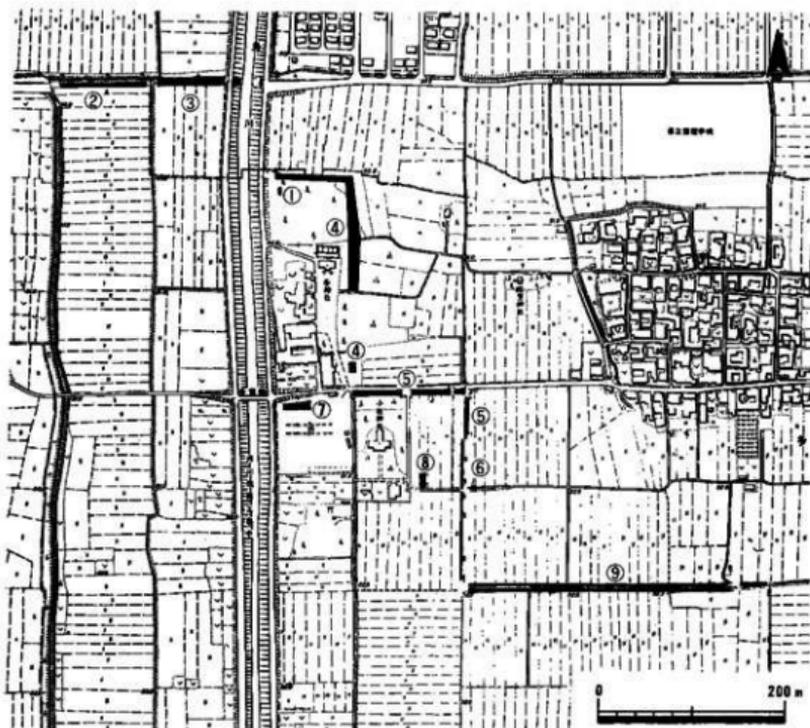
番号	遺跡地図	遺跡名	所在地	種類	時代	遺跡概要	遺物
1	11-C-49	多遺跡	磯城郡田原町多字タジマほか	遺物散布地	弥生～古墳・後		弥生、土師、須惠
2	14-A-13	土師遺跡	橿原市中曾町字辻堂ほか	陶器跡	弥生～奈良		弥生、土師、須惠
3	14-A-11	中野川遺跡	* 中野町	集落跡	弥生・前～古墳	溝	弥生、土師、須惠、瓦器 木製品、自然遺物
4	11-C-44	佐味遺跡	磯城郡田原町高田字法楽寺ほか	遺物散布地	弥生、古墳・後～平安		弥生、土師、須惠、瓦器
5	11-C-69	矢部遺跡	* 矢部	遺物散布地	古墳・前～中世	方形周溝墓群	土師、須惠器
6	11-C-30	十六面・泉王寺遺跡	* 十六面字山ノ内	遺物散布地	古墳・後～鎌倉		土師、須惠、瓦器、瓦葺土器、水引、土穴
7	11-C-33	保津・高古遺跡	* 高古、保津	遺物散布地	弥生～鎌倉		弥生、土師、須惠、瓦器、瓦葺土器、ササキイノシ、葎丸
8	11-C-74	阪手遺跡	*				
9	11-C-71	田原山古墳	* 矢部	古墳?	内墳・後	円墳・径約35m	
10	11-C-72		*	古墳?			
11	11-C-36	羽子田遺跡	* 田原町字羽子田	遺物出土地	古墳		埴輪(人物、牛、猪、馬、四脚)
12	14-A-17	舟塚古墳	橿原市中曾町町原町字山崎	古墳	古墳	前方後円墳(横立)・径約40m	
13	14-A-16		* 字藁山	古墳	古墳	円墳	
14	14-A-9	多大塚池遺跡	磯城郡田原町多字上ノケ	遺物出土地	古墳～鎌倉		土師、須惠、瓦器
15	11-C-66	十小池遺跡	橿原市十小町	遺物散布地	弥生～平安		弥生、土師、須惠、瓦器
16	11-C-52	多東新地遺跡	磯城郡田原町多字四ノ坪ほか	遺物散布地	弥生～平安		弥生、土師、須惠、瓦器
17	11-C-46		* 矢部字泉崎ほか	遺物散布地	弥生～鎌倉		弥生、土師、須惠、瓦器、埴輪
18	11-C-45		* 佐味	遺物散布地	弥生～平安		弥生、土師、須惠、瓦器
19	11-C-47		* 矢部、宮崎	遺物散布地	古墳・後～鎌倉		土師、須惠、瓦器、瓦葺
20	11-C-43		* 三笠字堂ノ前ほか	遺物散布地	古墳・後～平安		土師、須惠、瓦器
21	11-C-42	藤王寺池遺跡	* 藤王寺字釜内ほか	遺物散布地	弥生～平安		弥生、土師、須惠、瓦器、瓦葺土器
22	11-C-39		* 十六面字トノエほか	遺物散布地	弥生～平安		弥生、土師、須惠、瓦器
23	11-C-41		* 藤王寺字中津屋	遺物散布地	古墳・後～平安		土師、須惠、瓦葺土器
24	11-C-38		* 平野字三枝田ほか	遺物散布地	平安		土師、須惠、瓦器、瓦葺土器
25	11-C-60		* 阪手、大安寺	遺物散布地	古墳・後		土師、須惠
26	11-C-58		* 阪手字下受田ほか	遺物散布地	鎌倉		土師、須惠
27	11-C-30		* 西竹田字福地	遺物散布地	平安		土師、須惠、瓦
28	11-C-57		* 阪手字大倉ほか	遺物散布地	鎌倉		土師、須惠、瓦葺土器
29	11-C-51		* 多字垣内	古墳	古墳	円墳・径約16m	
30	14-A-10		* 多字松ノ下	古墳	古墳	円墳?・径約5m	
31	14-A-15		橿原市中曾町町西堀内字徳	内墳?			
32	14-A-14		* 新屋敷	埴輪出土地	古墳		埴輪(猪)
33	14-A-33	大乗東照池遺跡	橿原市高木町	遺物散布地	中世	中世集落跡	

弥生前期から古墳時代まで続く母集落的なムラの一つとして扱えられそうであるが、まだ、遺跡の範囲がおさえられる段階であって、その実態は定かでない。しかし、今までの発掘成果からすれば、弥生中期には環濠を有するムラに発展していたようである。ただ、時期ごとに遺構の偏在があり、遺跡全体がムラとなっていたとは考えられない。この他、多遺跡同様、母集落的なムラとして考えられているのに、中曾司遺跡⁽³⁾、保津・宮古遺跡⁽⁷⁾がある。これらについては土器が継続的に存在している他、その実態は不明である。以上の3遺跡をとり囲むように土橋遺跡⁽²⁾、佐味遺跡、阪手遺跡、十六面・薬王寺遺跡⁽⁶⁾などがある。佐味遺跡は弥生中期(第Ⅲ様式)より新たに誕生したムラと考えられる。また、他の遺跡は弥生後期頃に分村、形成したと思われる。そして、これらの多くは古墳時代まで継続的に営まれている。古墳時代の遺跡の中で比較の実態がわかっているのが、多遺跡、矢部遺跡、十六面・薬王寺遺跡であろう。多と十六面・薬王寺遺跡では土坑を中心に多量の遺物が出土しており、集落跡と考えられる。これに対して矢部遺跡では方形周溝墓群で墓地域として扱えられるであろう。この他、古墳では蛇行状鉄器を出土した団栗山古墳⁽⁹⁾が多遺跡の北西500mに存在している。現存しないが小規模な古墳が低地部に多数存在したと思われ、埴輪片を出土する遺跡が多い。飛鳥・奈良時代の遺跡は少ない。佐味遺跡がこの時代の土器を出土しており、百済寺との関係を考える上で重要な遺跡となりうるかもしれない。平安時代以降についてはその実態が明らかになっているものとして十六面・薬王寺遺跡があげられる。環濠を有する館跡で内部に多数の井戸が発見されている。飯高遺跡、佐味遺跡などもこのような形態をもつ遺跡として考えられるであろう。

以上、多遺跡を中心とする地域の歴史を振り返ってきたが、一つの遺跡においても継続あるいは断続的な時期の遺構・遺物が検出されている。これは居住に適した立地条件の選択ゆえの長期間にわたる土地占有と考えられよう。多遺跡もこのような遺跡の一つとして扱えることができる。

第 2 節 多遺跡の既調査の概要

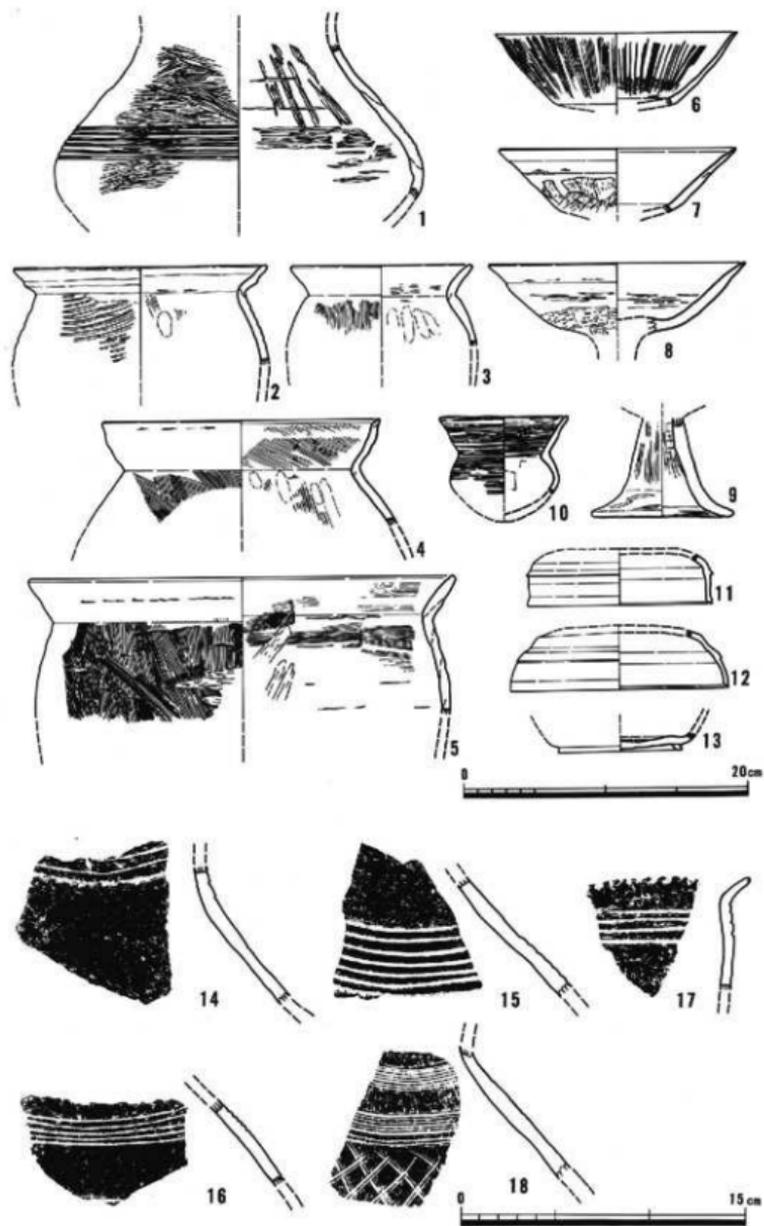
多遺跡は昭和47年の飛鳥川河川改修時に多量の土器が出土したことにより、その一端が明らかになった。この時点においては、1. 弥生時代全期間の土器が出土している。2. 多神社付近は第Ⅰ様式(中・新)が多い。3. 小杜神社付近は庄内式が多い。という三点の認識が表採地点よりなされていた。その後、同志社大学・博物館による多神社の総合調査の一つとして小規模な発掘がおこなわれた⁽⁸⁾(第1次調査)。この調査では弥生時代後期から古墳時代前期の土器が検出されている。黒色泥土層の遺物包含層が形成されているが、遺構については不明である。第2・3次調査は県道の改良工事に伴う発掘調査⁽⁹⁾で、多遺跡の北端部に位置する。特に第3次調査では古墳時代前期から後期に至る遺構・遺物が多数検出された。これに対して、弥生時代の遺構がほとんど検出されていないことから、この地区は古墳時代に居住区として広がったと考えられよう。ま



第3図 多遺跡の既調査地位位置図
(数字は各次数を表わす・第7・8次は本報告分)

第2表 多遺跡調査一覧表

調査次数	調査地	調査機関	原因	調査日時	備考
第1次	多268-1	同志社大学	多神社総合調査	1972.11.23~11.27	
第2次	多730	権原考古学研究所	国道大和高田 環本線改良工事	1977.10.24~11.8	
第3次	多80-4 他	・	・	1978.9.25~10.31	
第4次	多568-2 他	・	水路改修	1979.2.2~2.12 1979.8.12~10.17	立会調査 本調査
第5次	多539-3 他	・	水路改修	1983.1.10~1.22	
第6次	多284 他	・	水路改修 町道	1983.12.13~12.20	
第7次	多262-3 263 264	田原本町教育委員会	工場新築	1984.8.20~9.7	
第8次	多280 他	・	住宅新築	1984.9.21~9.25	
第9次	多181 他	権原考古学研究所	水路改修 町道	1984.12.13~1.30	



第4圖 飛鳥川採集土器実測図(1/2)及び拓影(3/6)

た、第2次調査では古墳時代の井戸一基のみで顕著な遺構がなく、居住区の周辺地区にあたるのであろう。第4次から第6次調査は多遺跡を縦断する調査であった。第4次調査は多神社の北東地区で最も遺構・遺物が出土している。弥生前期（新段階）の大溝や櫓を伴う¹²弥生中期の大溝が検出され、環濠としての性格が考えられている。中期の大溝より以南は居住区外になると思われ、多神社の北側が弥生時代の中心になると思われる。5次調査では弥生時代前期の遺構が検出¹³されているが、それほど顕著ではなく、他の時期のものはない。多遺跡の東限を示すものであろう。さらに、第6次調査¹⁴や第9次調査¹⁵においても弥生時代の様相は遺跡の周辺部であることを物語る。ただ、弥生前期の遺構・遺物が点在することから、多ムラの形成を考える上で重要になってこよう。

以上、簡単に多遺跡の既調査の概要を述べてきた。これらを総合すると、1. 弥生時代前期は点々と遺構が検出されており、小規模な群として扱えられるかもしれない。第4次調査で検出された大溝は前期段階の北西に位置する環濠と考えられる。2. 弥生中期・後期は多神社の北側に中心がある。3. 古墳時代は飛鳥川の西岸に中心をもっているが、また、多神社付近にも一つの分布地区がみられることから二群に分かれるのか、あるいは、大規模なムラになるのか今後の調査が必要となっている。このように、多ムラの様相はわずかながら解明されつつあるが、面的な広がりのある調査がおこなわれていないことから、遺構群のまとまりや変遷をとらえるまでにいたっていないのが実状といえよう。

注① 榎原考古学研究所寺沢薫氏より御教授を賜った。感謝します。

- ② 東海「阪手遺跡発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報』1982年度 榎原考古学研究所1983
- ③ 石野博信「大和の弥生時代」『考古学論叢』第2巻 榎原考古学研究所1973
- ④ 河上邦彦・石野博信「榎原市中曾司遺跡予察調査の概要」『青報』No.17 榎原考古学研究所1971
- ⑤ 小島俊次「古代・中世」『平野村史』平野村史編纂委員会1962
- ⑥ 網干善教「榎原市上楯弥生式遺跡」『奈良県抄報』9 1956
- ⑦ 伊藤勇介他、「十六面薬王寺遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1981年度 榎原考古学研究所1982
- ⑧ 末永雅雄「磯城郡多村大字矢部団栗山古墳」『奈良県抄報』2 1941
- ⑨ 注③に同じ
- ⑩ 安井良三「多神社屋内遺物包含地（A地点）調査報告」『同志社大学博物館学年報』第9号 1977
- ⑪ 河上邦彦「多遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1977年度 榎原考古学研究所1978
河上邦彦「多遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1978年度 榎原考古学研究所1979
- ⑫ 藤井利章「多遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1981年度 榎原考古学研究所1982
- ⑬ 藤井利章「多遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1982年度 榎原考古学研究所1983
- ⑭ 関川尚功「多遺跡第5次発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報』1983年度 榎原考古学研究所1984
- ⑮ 榎原考古学研究所、佐々木好直氏より御教授を賜った。感謝します。

第 2 章 多遺跡第 7 次調査の成果

第 1 節 調査の契機とその至る経過

多遺跡は昭和47年におこなわれた飛鳥川の河川改修によって遺跡の一端が明らかにされたが、その後、数次にわたる発掘調査により弥生時代から古墳時代にかけての大集落跡であることが判明しつつある。さて、本報告は多遺跡の南部にあたる多262-3、263、264番地において奈良日精株式会社工場の工場新築予定地を田原本町教育委員会が発掘調査したものである。昭和58年12月、奈良日精株式会社より工場新築に伴う発掘届が提出された。当初、多遺跡の内容解明の重要性から全面調査の必要性があったが、各方面の協議の結果、工場新築部分については設計変更を願ひ、現地表面の総基礎とし、地下遺構への影響をなくすよう協力を求めた。調査は原因者負担で奈良日精株式会社の協力を得、田原本町教育委員会が実施した。調査地は両者協議の末、工場新築の北側で駐車場予定地でトレンチ調査となった。

発掘調査は、昭和59年8月20日より同年9月6日まで要し、発掘面積は約160㎡である。調査地は約1mの客土がされており、バックフォーによる客土及び旧水田耕土・床土の除去から調査を開始した。調査の結果、弥生時代前期の溝2条、自然河道等を検出し、多遺跡の南端の様相をおさえることができた。

調 査 日 誌 抄

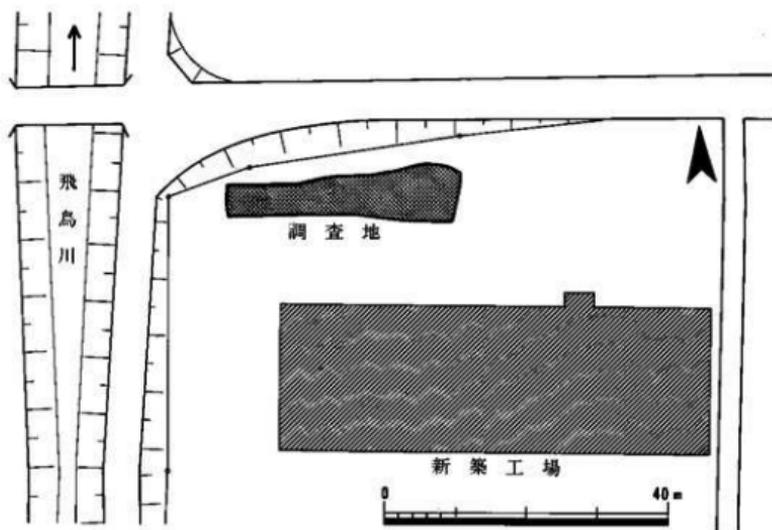
8月20日	機械搬入。調査トレンチの地区設定後、バックフォーにて客土等の除去。廃土は敷地外へ搬出。トレンチ西端より遺構面の検出作業にかかる。須恵器など少量の土器検出。	8月28日	落ち込み状遺構の調査。遺物は少ない。
8月21日	トレンチ中央部の客土等の除去。遺構らしきもの検出しはじめる。遺物は弥生時代前期が主流を占める。	8月29日	昨日に続き、落ち込み状遺構の掘り下げ。西端のビット群及び土坑完掘。
8月22日	昨日、掘削部分において壁崩壊し、午前中除去作業。客土等の除去はトレンチ西端まで進む。西端において河道らしきもの検出。	8月30日	トレンチ東半の遺構検出及び写真撮影。
8月23日	遺構の検出作業ならびに排水溝の掘削。地区杭の設定。	8月31日	SD-02溝の調査。半完形2点(第Ⅱ様式のもの)を検出、他の土器片は第Ⅰ様式のものである。
8月24日	トレンチ壁崩壊の除去。トレンチ東半の遺構検出。	9月1日	SD-02の調査。SD-02の南端において土器集中する。
8月25日	トレンチ西端部掘り下げ。包含層より土師器、須恵器等出土。	9月3日	SD-02の調査。土器群の実測及び取り上げ。 自然河道の掘り下げ。
8月27日	トレンチ西半の遺構検出。落ち込み状遺構の掘り下げ。	9月4日	自然河道の掘り下げをおこなうが湧水のため、掘り下げ不可能となる。
		9月5日	自然河道の部分的な調査。
		9月6日	遺構実測及びトレンチ北壁面の土層断面図の作成。
		9月7日	奈良日精及びワールド設計に現地にて現場説明。本日をもって調査を終了する。

第 2 節 調査の成果

1. 遺構

(1) 層序

調査地は既に約1mの客土がなされているが、本来は水田地であった。水田上面の標高は50.7mである。水田以下の土層を基本抽出するならば、第Ⅰ層は水田耕土で暗灰褐色粘土、第Ⅱ層は水田床土で暗灰青色粘土である。第Ⅲ層は灰褐色粘質土でトレンチの西半に堆積している。第Ⅳ層は茶灰色粘質土でトレンチ全体にみられる。第Ⅴ層・暗灰褐色粘質土、第Ⅵ層・淡茶灰色粘質土は自然河道上に形成された土層で均一な層を形成していない。第Ⅶ層は黒褐色粘質土で広く遺跡を覆い、安定したベース層である。本調査地においては沖積地に立地する他の弥生遺跡でみられるような黒色粘土や青灰色シルトを検出していない。今後、弥生遺跡の立地するベース層の形成と遺跡の関係を小地域ごと検討していく必要があるだろう。第Ⅳ層は古式土師器・須恵器などを含む土器包含層であるが、土器の包含量はごくわずかである。第Ⅵ層上面および自然河道上で弥生時代前期の諸遺構を検出した。



第 5 図 第 7 次調査トレンチ配置図 (S=1/500)

(2). 遺構

今回の調査で検出した遺構としては弥生時代前期以前の河道1条、前期の溝2条、落ち込み及び土坑各1基、時期不明のピット群である。遺構はトレンチ全体にわたって検出した。

自然河道

本河道はトレンチ全体にわたって検出した。河道方向は確定できないが、東南東から西北西方向に流れていたと思われ、トレンチ西端では同じ方向の中洲状の高まりがみられた。規模は幅30m以上、深さは不明である。中洲上の高まりより西側の河道では黄褐色あるいは青灰色微砂によって最終的に埋設している。弥生時代以前のものであろう。これに対して、高まりより東側では河道の堆積が暗灰色粗砂と黒色粘土の互層で埋設している。この粗砂と粘土の互層内にはわずかであるが土器片及び石胞丁片が含まれており、弥生時代前期段階まで河道として残っていたと考えられる。

SD-01溝

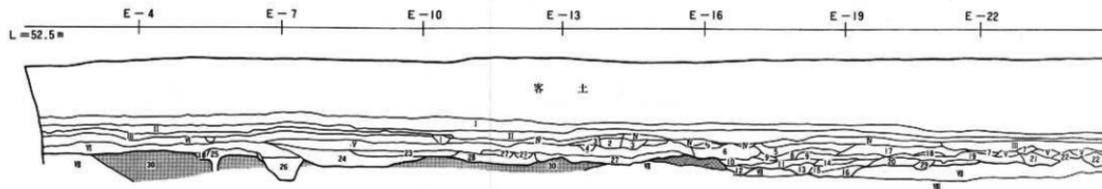
トレンチ西端で検出した弥生時代前期の小溝である。溝幅0.8m、深さ0.6mを測る。南南東から北北西に、ほぼ直線的に走向する小溝である。堆積土は黒褐色粘土の単一層で、粘性は強い。遺物は弥生前期の土器片が少量出土している。

SD-02溝

トレンチ中央から西端にかけて検出した弥生時代前期から中期初頭の小溝である。「コ」字状にめぐる平面形態を有しているが、平面プランや溝の深度は整っていない。検出当初、方形周溝墓の可能性も考えたが、上記のように平面プランが整っていないことや溝が方形プランあるいは陸橋部を有するような形態を呈さないことから方形周溝墓の可能性は少ないと考えられる。溝幅1~1.4m、深さ0.3~0.5mを測る。トレンチ南端で急速に深くなる。土層は三分層され、上層・暗茶褐色土、中層・黒色粘土、下層・黒色粘土（青灰色微砂や炭化物含む）である。下層の黒色粘土は南端の深くなっているところに堆積していた。

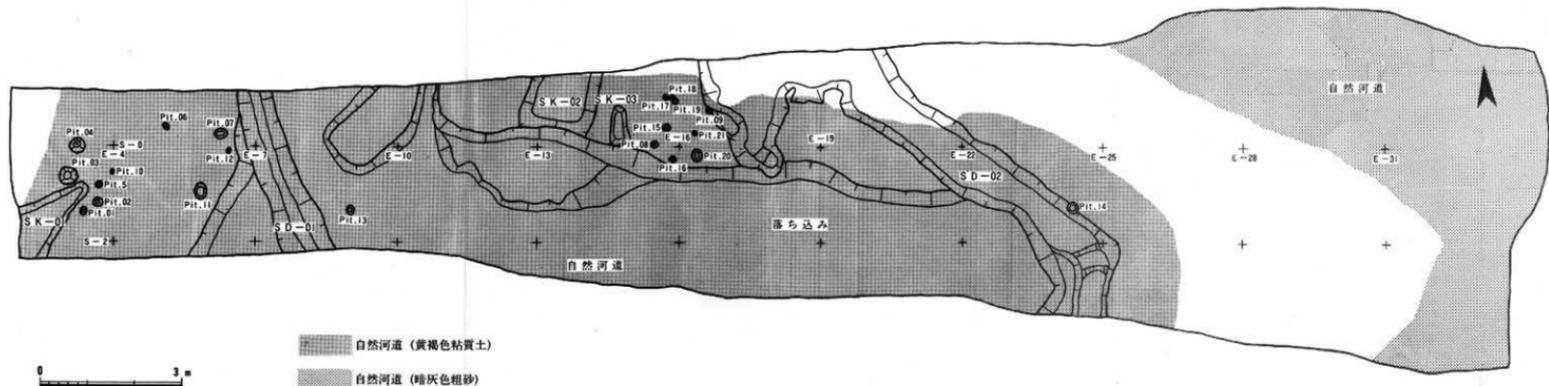
遺物は上層で半完形品2点が出土しているが、その一つは広口長頸壺で溝の西端の取束した所で検出した。口縁部を南へ向け、横転した状態であった。口縁部には壺の底部の破片が入りこんでいた。壺棺墓の可能性も考えられるが判断できなかった。もう一点は無頸壺であるが、本来は完形であったものが溝の削平時にその一部を欠失したものと考えられる。溝の中央付近で検出している。

下層では比較的まとまって土器片が出土した。これは溝南端の深み状の斜面に流れ込むような状態で検出した。土器は溝の東斜面の方が下層上位で貼り付くような状態で検出した。これに対し、溝の中央から西斜面では下層中位で土器を検出した。

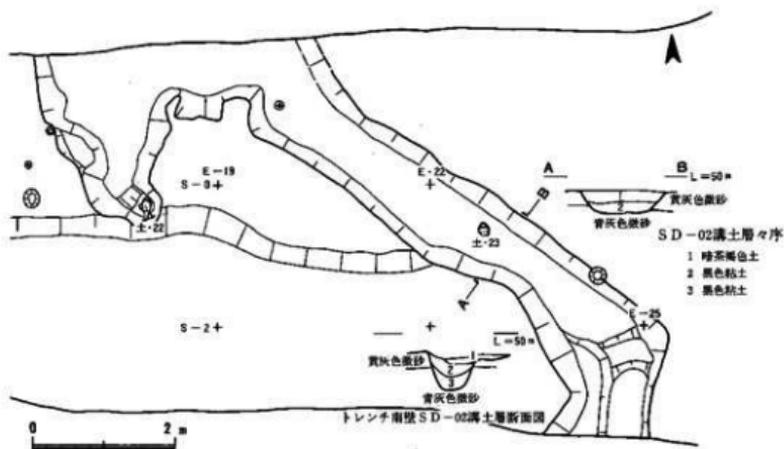


トレンチ北壁土層層序

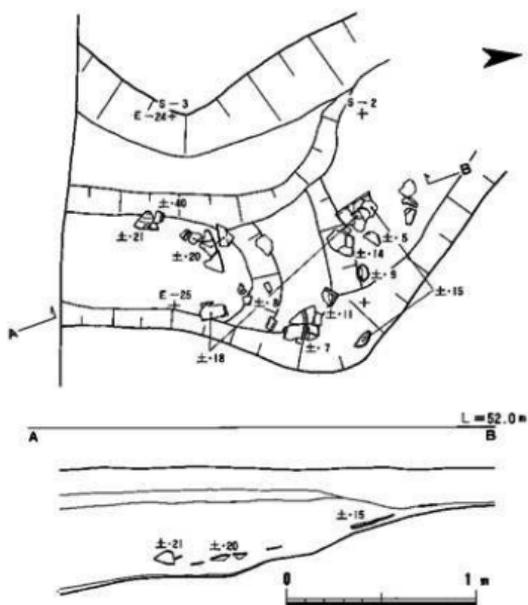
- | | | | |
|-----------------|-----------|------------|------------|
| I 水田耕土(暗灰褐色粘土) | 1 暗灰青色粘土 | 11 淡灰色粘土 | 21 黒褐色粘質土 |
| II 水田床土(暗灰青色粘土) | 2 明茶褐色土 | 12 灰色粘土 | 22 明茶褐色粘質土 |
| III 灰褐色粘質土 | 3 灰褐色粘質土 | 13 灰色粘土 | 23 淡灰褐色粘質土 |
| IV 茶灰色粘土 | 4 暗灰褐色土 | 14 暗灰色粘土 | 24 黒褐色粘土 |
| V 暗灰褐色粘質土 | 5 暗灰褐色粘土 | 15 暗灰色粘土 | 25 灰色粘土 |
| VI 淡茶灰色粘質土 | 6 暗灰色粘土 | 16 灰色粘土 | 26 黒褐色粘土 |
| VII 黒褐色粘質土 | 7 灰黒色粘土 | 17 暗灰色粘土 | 27 黒褐色粘質土 |
| VIII 暗黄褐色粘土 | 8 暗灰色粘土 | 18 暗黄褐色粘質土 | 28 淡灰褐色粘質土 |
| | 9 暗灰色粘土 | 19 暗褐色粘質土 | 29 灰褐色粘質土 |
| | 10 暗灰褐色粘土 | 20 暗褐色粘土 | 30 黄褐色粘質土 |



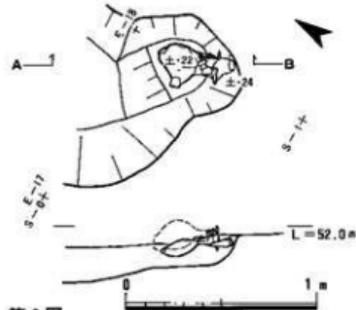
第6図 第7次調査検出遺構平面図及び土層断面図



第7図 S D-02溝 遺構平面図及び土層断面図 (S=1/60)



第8図 S D-02溝 黒色粘土層土器出土状況平面及び見とおし図 (S=1/60)



第9図
SD-02溝 暗茶褐色土層 土器出土
状況平面及び見とおし図 (S=1/6)

第3表 ビット一覧表

ビット 番号	規 模 (cm)	
	径 (長径)	深 度
ビット-01	20	7
ビット-02	28	15
ビット-03	46	25
ビット-04	38	24
ビット-05	18	14
ビット-06	20	13
ビット-07	36	23
ビット-08	22	16
ビット-09	12	3
ビット-10	14	15
ビット-11	42	8
ビット-12	16	7
ビット-13	24	2
ビット-14	23	12
ビット-15	22	10
ビット-16	18	14
ビット-17	14	3
ビット-18	14	6
ビット-19	18	4
ビット-20	28	10
ビット-21	15	4

落ち込み状遺構

トレンチのほぼ中央の南端で検出した浅い凹地状の遺構である。自然河道が埋没した後に凹地として残存したものと考えられる。埋土は茶灰色粘土で深さ0.2 m程の浅いものである。遺物は弥生時代前期の土器片が少量出土している。

SK-02土坑

落ち込み状遺構の北側で検出した土坑である。平面プランは落ち込みによって切られている為、明らかでないが長方形プランである。長軸1.4 m以上、短軸1.4 m、深さ0.2 mを測る。埋土は黒褐色粘質土である。弥生時代前期の土器が出土している。

ビット群

トレンチの中央から西端にかけて20基あまりのビットを検出した。ビットは径10~40cmのもので20cmまでのものが多い。ビットは落ち込み状遺構からはずれた部分に群在している。埋土は暗灰褐色粘質土が多い。ビットからは須恵器等が出土しており、古墳時代もしくはそれ以降の所産のものであろう。

2. 遺物

(1). 土器

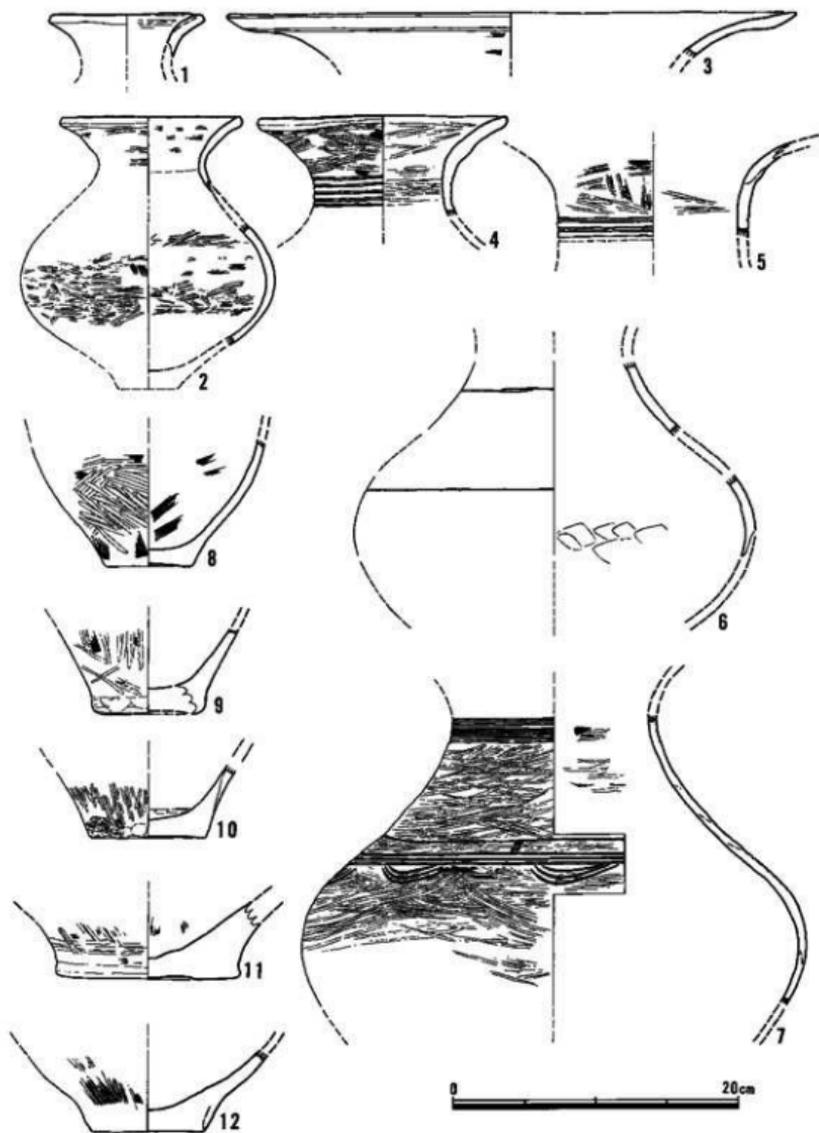
出土した土器は弥生土器・土師器・須恵器等で、最も弥生土器が多い。遺物量は遺物箱で4箱である。大半が細片で図化できるものは少ない。

1. 各遺構出土土器

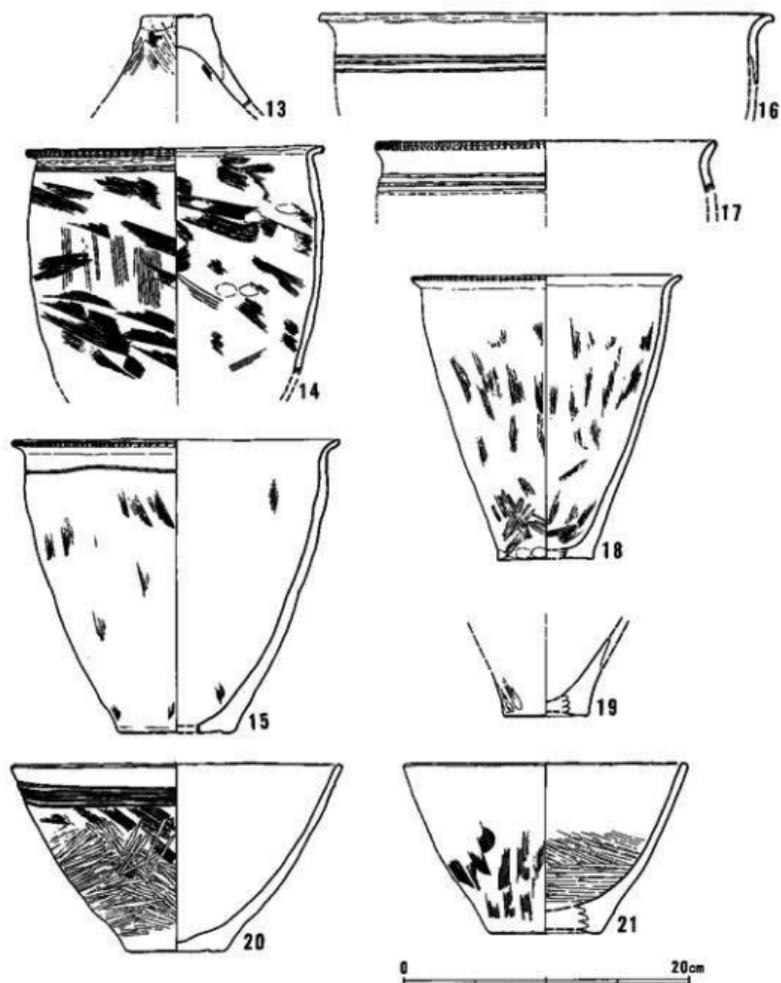
SD-02出土土器 (第10~12・15・16図)

a. 前期の土器

壺 広口壺のみであるが中形と大形の二種に分類できる。完存品はないため、各々の計測値を明らかにすることはできないが、中形品では体部径が18~35cm前後になるものである。体部が張り出し、扁球形を呈す。また、



第10图 SD-02沟 出土土器1 (S=1/4)



第11図 SD-02溝 出土土器 2 (S=3/4)

口縁端部は円頭状におさめている。

削り出し突帯を有するものはなく、大半がヘラ描き沈線による施文である。ただ、29の土器は一条の貼り付け突帯を有している。ヘラ描き沈線は頸部と胴部に施され、1条(6)から5条(4)の沈線がみられる。大半が、4条前後のものである。7の土器は頸部に6条以上、胴部に3条の



第12図 SD-02溝 出土土器3 (S=1/4)

ヘラ描き沈線をめぐらし、胴部の沈線下には粗雑な重弧文を描いている。この3条の沈線の上位には、ミガキによって消された2条以上の沈線がわずかに残っている。2の土器は無文であろう。

大形の壺形土器は3と27である。いずれも口縁部の破片である。口頸部が外方へ大きく広がる形態を有すると思われる。3は口縁端部を尖頭状にし、27は櫛状工具によって面をもたせ、ヘラによる刻目を施している。

壺の底部では、8は底部裏面及び側面を削った後、ミガキを施している。11は大形品で、底部を掘え置いて成形したらしく、砂粒の圧痕が明瞭に残っている。底部裏面中央は削って凹ませている。12も底部裏面を削っている。側面は粘土を貼り付けた痕跡がみられる。

甕 甕には口径20cm前後のものとして30数cmの二種の大きさがある。前者のものとして、14・15・17・18・19・47・49・50・51がある。これらはさらに口頸部が鋭く屈曲するもの(14・15・47・51)と上外方へゆるやかにのびるもの(17・18・44・49・50)がある。両者とも口縁部端面を有しており、端面にはヘラによる刻目が施されている。体部の施文では18・44が無文で、口縁部も面を有しながらもやや円頭状になりつつある。他のものは1条から5条のヘラ描き沈線が施されている。1条の甕は口縁部の屈曲が鋭く、古い様相を留めているに対し、無文の甕は最も新しい要素をそなえていると考えられる。

大形の甕は16の1点で、3条のヘラ描き沈線を施し、口縁端面には刻目を有していない。

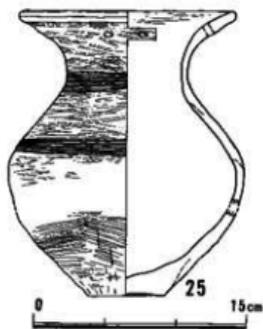
鉢 鉢は二点 (20・21) あるが、両者とも口縁部まで直線的に上外方へひろがる形態である。口縁部は端面を有す。20には5条のヘラ描き沈線が施されている。

中期の土器 (第12図)

b. 壺 広口長頸壺 (22) と無頸壺 (23) でSD-02溝の第1層より単独で半完形品として検出した。埋没当初は完形であった可能性が高い。22は全体に薄く仕上げられており、球形の体部に長い頸部を有し、口縁部は外方へ鋭く屈曲する。口縁端部は面をもつが、上方にハネ上げ口縁となっている。外面は縦位のハケ後、ハケ状工具による7帯の直線文を施すが、不明瞭である。体部下半はミガキを施している。

無頸壺 (23) は壺の頸部以上を除去した形態である。体部上半には櫛描きによる流水文が施されている。体部下半は横位のミガキをおこなっている。

甕 24は甕底部と思われる破片で、22の広口長頸壺と伴出したものである。底部まで薄く仕上げられており、内外面ともにハケがみられるが、ナデによって消されている。



第13図 落ち込み状遺構出土土器 (S=1/4)

落ち込み状遺構出土土器 (第13・15図)

25は広口壺で、頸部と体部に各々5条ずつのヘラ描き沈線を施している。口頸部には二つの紐通し孔が穿たれている。調整は体部下半にケズリがみられるが、ミガキによって消されている。

33は壺の体部破片で3条のヘラ描き沈線を施している。52は甕の口縁部破片で、端部に刻目を有している。

SK-02出土土器 (第14・15図)

26は壺口縁部の破片で、口縁端部は丸くおさめてある。34も同じく壺の体部破片である。体部に3条のヘラ描き沈線を施している。

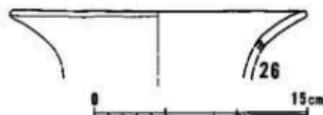
SD-01出土土器 (第15・16図)

42は壺体部の破片で5条以上の沈線をめぐらしている。46・48は甕の口縁部で46は4条、48は5条のヘラ描き沈線が施されている。口縁部は鋭く屈曲し、

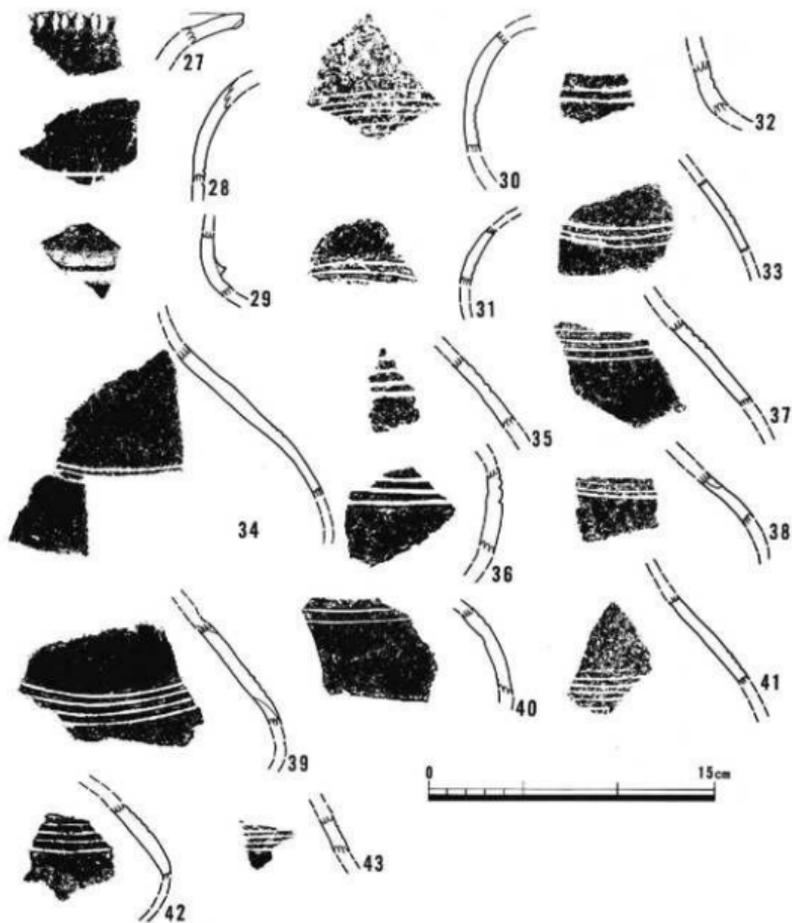
端部は面を有す。口縁端面には刻目が施されている。

自然河道出土土器 (第15・16図)

28は壺頸部の破片で2条以上のヘラ描き沈線が施されている。45は甕の口縁部で、外面にはハケ調整が明瞭に残っている。体部ではハケをナデで消していると思われる。口縁部には刻目を有する。



第14図 SK-02土坑 出土土器 (S=1/4)



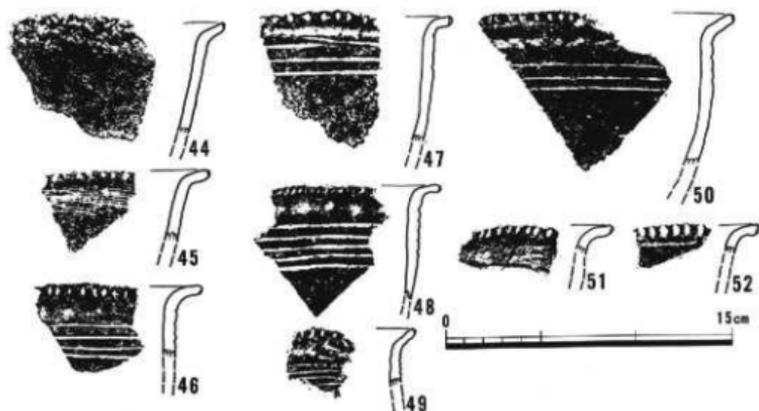
第15図 各造構出土土器拓影1 (S=1/2)

SK-03出土土器 (第15図)

37は壺体部破片で5条以上のヘラ描き沈線文を施している。外面には緻密なミガキ調整がおこなわれている。

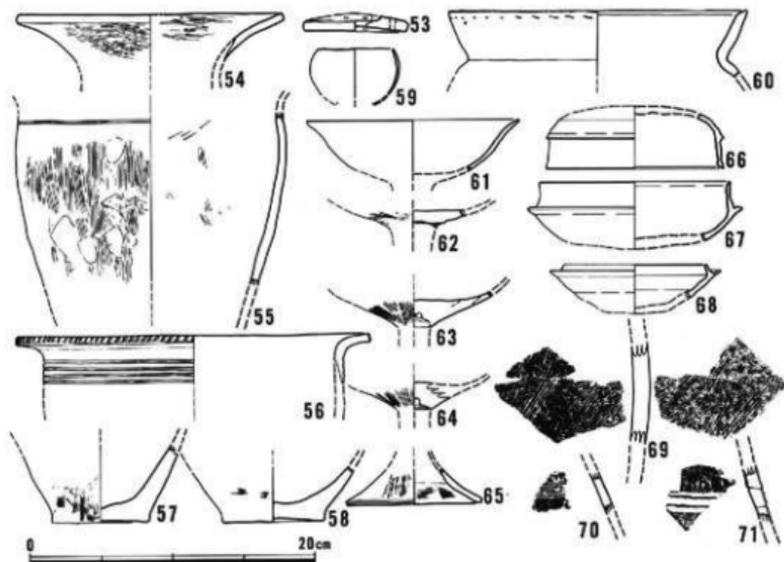
包含層出土土器 (第17図)

53~58は弥生前期の土器である。53は壺の蓋で二つの紐通し孔がみられる。小形品で無文である。54は壺の口縁部、55・56は甕の破片である。55の甕は縦位のハケ後、ナデをおこなっている。



第16図 各遺構出土土器拓影2 (S=1/4)

56は口縁端部が面を有するもので刻目を施している。59は製塩土器の可能性があり、薄手で器面はあれている。60～65は土師器である。60の甕の内面はケズリ後にナデをおこなっている。61～65は高杯である。62には外面にケズリが明瞭に残っている。また、脚部との接合部には刻みを施している。63・64は同形・同手法で、外面はハケ調整である。脚部との接合部は径1cm程の穴



第17図 包含層出土土器 (S=1/4)

を穿ち、その中に径4mm程の棒状のものを突きさして接合したと思われる。67・68・71は須恵器、69は埴輪片である。70は弥生土器と思われるが器形不明である。

2. 土器胎土の砂礫観察

はじめに

採取された試料の表面に見られる砂礫を裸眼と倍率30倍の実体鏡で観察した。観察された砂礫種は岩石片として、黒雲母花崗岩、花崗岩、閃緑岩、斑岩、流紋岩、チャート、火山ガラス、変輝緑岩、片麻状黒雲母花崗岩、鉱物片として、石英、長石、黒雲母、角閃石である。観察表で花崗岩としたものは、黒雲母花崗岩、花崗岩である。後者の花崗岩は石英、長石がかみ合った粒からなるもので、閃緑岩である可能性もあるが、便宜上、花崗岩とした。また、閃緑岩としたものは、石英と角閃石がかみ合った場合、長石と角閃石がかみ合った場合があり、花崗岩である可能性もあるが、便宜上、閃緑岩とした。砂礫の粒形は、角、亜角、亜円、円の4段階に区分した。粒径は、裸眼観察の場合、2mm以上を粗粒(L)、2mm未満0.5mm以上を中粒(M)、0.5mm未満を細粒(S)とし、実体鏡下での観察の場合、1mm以上を粗粒(L)、1mm未満0.5mm以上を中粒(M)、0.5mm未満0.2mm以上を細粒(S)、0.2mm未満を微粒(SS)とした。量は見かけの個数で、非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅かの5段階に区分した。

観察された砂礫構成と遺跡近くの河川の砂礫構成とを比較することにより、土器中の砂礫の採取地を推定した。

砂礫の特徴

砂礫種の特徴について述べる。

黒雲母花崗岩：色は灰白色、灰色である。角礫を主とし、亜角礫が僅かに認められる。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英、長石に比べて雲母が非常に細粒であり、量が少ない。黒雲母が細粒の黒雲母花崗岩である。

花崗岩：色は灰白色、灰色である。角礫を主とし、僅かに亜角礫が認められる。造岩鉱物は石英、長石からなり、かみ合っている。石英・長石がかみ合った岩片では、石英閃緑岩、花崗閃緑岩等の岩片の一部にも相当するが、便宜上、可能性が一番高い花崗岩とした。

閃緑岩：色は灰色である。角礫を主とし、僅かに亜角礫が認められる。造岩鉱物は石英と角閃石、長石と角閃石がかみ合った場合がある。岩片であるため花崗岩に属する可能性もあるが、石英閃緑岩・花崗閃緑岩に属する可能性が強いため、便宜上、閃緑岩とした。

斑岩：色は暗緑色、暗灰色である。亜角礫を主とし、角礫が僅かである。造岩鉱物は長石・角閃石からなる場合が多く、ごく僅かに長石・角閃石・輝石からなる場合がある。含まれる角閃石は量が非常に多く、長石は僅かである。岩片であるため、閃緑岩に属する可能性もあるが、便

宜上、斑岩とした。

流紋岩：色は淡茶褐色である。礫形は亜円礫である。無色透明、細粒自形の石英が点在する。石基は淡茶褐色、玻璃質で固い。

砂岩：色は暗灰色である。礫形は亜角礫である。細粒の石英質砂岩である。

変輝緑岩：色は暗緑色、暗灰色である。亜円礫が多く、亜角礫は僅かである。造岩鉱物は、白色の長石、黒色細粒柱状の角閃石である。

片麻状黒雲母花崗岩：色は灰色、灰白色である。亜角礫、亜円礫である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。全ての粒が一定の方向を向く。

チャート：色は灰色、暗灰色、赤褐色である。礫形は亜角礫、亜円礫である。

火山ガラス：色は黒色、無色で、透明である。黒色透明の場合が多い。貝殻状を示す場合が多く、フジボ状の場合はごく僅かである。

石英：無色透明の場合が多く、灰色、灰白色透明の場合が僅かである。礫形は角礫を主とし、ごく僅かに亜角礫が認められる。

長石：灰白色、白色の場合が多く、無色透明、白色透明の場合がごく僅かである。礫形は角礫である。

黒雲母：色は黒色、金色である。粒形は板状、粒状、六角形短柱状である。細粒で金色板状の場合が多い。六角形短柱状の場合はごく僅かである。

角閃石：色は黒色である。粒形は粒状、柱状である。柱状の場合、結晶面が認められることがある。

類型区分

多遺跡の弥生時代前期河道跡、河道跡から採取された砂礫試料をもとに、土器胎土中の砂礫構成を類型区分すれば4類型に区分される。砂礫種が少なく、類型区分しがたい場合は区分不能とした。

いずれも花崗岩質起源の砂礫を多く含み、碎屑岩類が含まれる試料はごく僅かである。区分は角閃石の形と量、碎屑岩類を基準とした。

I 類型：花崗岩、石英、長石、角閃石が含まれ、僅かであるが角閃石に結晶面が認められる。
石英が粗粒と細粒に分かれている…………… I a
石英の粒徑に明瞭な区分がない…………… I b

II 類型：花崗岩、石英、長石、角閃石が含まれ、角閃石が多く含まれる。
角閃石が裸眼でも比較的多く認められる…………… II a
角閃石が細粒で比較的多く含まれる…………… II b

III 類型：花崗岩、チャート、石英、長石、角閃石が含まれる。

チャートが比較的多く含まれる……………Ⅲ a

第4表 第7次調査における器種と類型

器種 類型	カメ	鉢	壺	高杯	杯	器台	埴輪	製塩	不明	合計
I a	10	1	20							31
I b	1		4				1		2	6
II a			3							3
II b	3	1								4
III a			1							1
III b			1	1						2
IV a	2		6	3						11
IV b	4		3	1						8
不能					3	1		1		5
合計	20	2	38	5	3	1	1	1	2	73

第5表 表採資料の器種と類型

器種 類型	カメ	鉢	壺	高杯	杯	器台	埴輪	製塩	不明	合計
I a	1		2	1						4
I b			2	2						4
II a										
II b	1									1
III a										
III b				1						1
IV a	3		2							5
IV b										
不能					3					3
合計	5		6	4	3					18

閃緑岩、斑斨岩、変輝緑岩、片麻状黒雲母花崗岩、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃石である。花崗岩、石英、長石、角閃石が全ての試料に認められ、閃緑岩、斑斨岩、変輝緑岩、片麻状黒雲母花崗岩、火山ガラスがごく僅かの試料に認められ、黒雲母は認められない試料もある。花崗岩は灰白色、灰色で、亜角礫が多く、角礫は僅かである。亜角礫は粗粒のものに多い。量は僅か～中である。粒径は0.5mm～7mmである。造岩鉱物は石英・長石、石英・長石・黒雲母である。閃緑岩は灰色、暗灰色で、角礫が多く、亜角礫がごく僅かである。量はごく僅か～僅かである。粒径は1mm～1.5mmである。造岩鉱物は石英・角閃石、長石・角閃石である。斑斨岩は暗緑色で、亜角礫である。量はごく僅か～僅かである。粒径は1mm～4mmである。造岩鉱物は長石・角閃石、長石・角閃石・輝石である。変輝緑岩は暗灰緑色、暗緑色で、亜角礫、亜円礫である。亜円礫が多い。量はごく僅かである。粒径は1mm～3mmである。造岩鉱物は長石と柱状の角閃石である。片麻状黒雲母花崗岩は灰白色、灰色で、亜円礫である。鉱物粒は一定の方向に並ぶ。量はごく僅かである。粒径は1mm～4mmである。造岩鉱物は石英・長石・黒雲母である。火山ガラスは

チャートがごく僅かに含まれる

……………Ⅲ b

IV類型：花崗岩、石英、長石、角閃石が含まれ、角閃石には結晶面が認められない。

角閃石は主として細粒で量が中～僅かである……………IV a

角閃石は主として細粒で量がごく僅かである……………IV b

器種と類型との関係は、第4表、第5表に示すとおりである。

I類型に属する壺・壺が出土数の約半数を占め、次にIV類型に属する壺・壺が約7分の2を占める。

各類型の特徴

各類型と河道跡試料の砂礫構成について述べる。

I類型：構成砂礫種は花崗岩、

第6表 第7次調査における土器の胎土観察表 その1

試料番号	灰土層		黒土層		赤土層		胎土	胎土	胎土									
	30層																	
1	L-△	L-X																胎土
2	L-X																	胎土
3	L-△	L-△																胎土
4	L-△	L-X																胎土
5	L-X	L-X																胎土
6	L-△	L-△																胎土
7	L-△	L-△																胎土
8	L-△	L-X																胎土
9	L-△	L-X																胎土
10	L-△	L-△																胎土
11	L-△	L-△																胎土
12	L-△	L-X																胎土
13	M-△	L-X																胎土
14	L-X	L-X																胎土
15	L-X	L-X																胎土
16	L-△	L-X																胎土
17	L-△	L-X																胎土
18	L-△	L-X																胎土
19	L-△	L-X																胎土
20	L-△	L-X																胎土
21	L-△	L-X																胎土
22	L-△	L-△																胎土
23	L-△	L-△																胎土
24	L-△	L-△																胎土
25	L-△	L-X																胎土
26	L-△	L-X																胎土
27	L-△	L-X																胎土
28	M-X	L-X																胎土
29	L-△	L-△																胎土
30	L-△	L-△																胎土
31	L-△	L-X																胎土
32	L-△	L-X																胎土
33	L-△	L-X																胎土
34	L-△	L-X																胎土
35	L-△	L-X																胎土
36	L-X	L-X																胎土
37	L-X	L-X																胎土
38	L-△	L-X																胎土
39	L-X	L-X																胎土
40	L-△	L-X																胎土
41	L-△	L-X																胎土

黒色・無色透明で、貝殻状、フジツボ状である。量はごく僅かである。粒径は0.2 mm～0.5 mmである。石英は無色透明、角礫である。粒径は0.2 mm～5 mmである。量は僅か～多いである。I a 類型に区分した試料の石英は粒径が1 mm以上と0.2 mm～0.5 mmに分かれる。自然砂であれば連続的に細くなるはずである。粗粒の粒は人為的に混和したと考えられる。I b 類型の粒は粗粒～細粒まで連続的に細くなる。長石は白色、角礫である。粒径は0.2 mm～5 mmである。量はごく僅か～中である。黒雲母は黒色、金色で、粒状板状である。粒径は1.5 mm以下である。量はごく僅か～僅かである。金色板状をなす場合が多い。角閃石は黒色で粒状・柱状の角礫である。粒径は1 mm以下である。量はごく僅か～中である。柱状の角閃石には、柱状面に結晶面が認められるものがある。

II a 類型：構成砂礫種は花崗岩、閃緑岩、石英、長石、黒雲母、角閃石である。閃緑岩は1 試料にのみ認められる。花崗岩は灰白色、灰色で角礫である。粒径は0.5 mm～7 mmである。量はごく僅か～僅かである。造岩鉱物は石英・長石である。閃緑岩は暗灰色、角礫である。粒径は0.5 mm～1.5 mmである。量はごく僅かである。造岩鉱物は石英・黒雲母・角閃石、長石・角閃石である。石英は無色透明で角礫である。粒径は0.2 mm～3 mmである。量はごく僅か～中である。長石は白色、灰白色で、角礫である。粒径は0.2 mm～2 mmである。量はごく僅か、中である。黒雲母は金色、黒色で、粒状、板状である。粒径は0.2 mm～3 mmである。量は僅かである。角閃石は黒色、粒状・柱状の角礫である。粒径は0.2 mm～3 mmで、稀に6 mmに及ぶ。量は中～多いである。角閃石は粗粒であるものが多いため裸眼で認められる。柱状の角閃石には劈開面が認められるが結晶面は認められない。

II b 類型：構成砂礫種は花崗岩、閃緑岩、斑岩、流紋岩、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃石である。花崗岩、石英、長石、角閃石は全ての試料に含まれる。花崗岩は灰白色である。粒径は1 mm～5 mmである。量はごく僅か～僅かである。造岩鉱物は石英・長石である。閃緑岩は灰色、角礫である。粒径は0.5 mm～1 mmである。量はごく僅かである。造岩鉱物は石英・角閃石である。斑岩は暗灰色、黒色で、亜角礫、亜円礫である。粒径は1 mm～4 mmである。量がごく僅かである。造岩鉱物は長石・角閃石、長石・角閃石・輝石である。火山ガラスは黒色透明、貝殻状である。粒径は0.2 mm～0.5 mmである。量はごく僅かである。石英は無色透明、角礫である。粒径は0.5 mm～5 mmである。量は多い。長石は白色、角礫である。粒径は0.5 mm～5 mmである。量はごく僅か～僅かである。黒雲母は金色、板状である。粒径は0.2 mm～1 mmである。量がごく僅かである。角閃石は黒色、粒状・柱状の角礫である。粒径は0.2 mm～1.5 mmである。1 mm以上の粒はごく僅かである。量は細粒の粒が多い。

III a 類型：構成砂礫種は花崗岩、砂岩、チャート、石英、長石、角閃石である。花崗岩は灰色、角礫である。粒径は1 mm～2 mmである。量はごく僅かである。造岩鉱物は石英、長石である。砂岩は灰色、亜角礫である。粒径は1 mm～2 mmである。量はごく僅かである。チャートは灰色、暗

灰色で、亜角礫、亜円礫である。粒径は1mm~2.5mmである。量は僅かである。石英は無色透明、角礫、亜角礫である。粒径は0.2mm~0.5mm、1mm~3mmである。角礫は細粒で、亜角礫は粗粒である。長石は白色、角礫である。粒径は0.5mm~1mmである。量は中である。角閃石は黒色、粒状の角礫である。粒径は0.2mm~0.5mmである。量はごく僅かである。

Ⅲb 類型：構成砂礫種は花崗岩、チャート、石英、長石、黒雲母、角閃石である。花崗岩は灰白色、灰白、角礫である。粒径は1mm~7mmである。量はごく僅か、僅かである。造岩鉱物は石英・長石、石英・長石・黒雲母からなる。チャートは、黒褐色、灰色で、角礫、円礫である。粒径は1.5mm~6mmである。量はごく僅かである。石英は無色透明、角礫である。粒径は0.2mm~5mmである。量は僅か~中である。結晶面が認められる場合がある。長石は白色、角礫である。粒径は0.2mm~2mmである。量が僅か~中である。黒雲母は黒色、金色で、粒状、板状である。粒径は0.2mm~1mmである。量がごく僅か~僅かである。角閃石は黒色、角礫である。粒径は0.2mm~0.5mmである。量は僅か~中である。

Ⅳ類型：砂礫構成はⅠ類型に酷似するが、角閃石に結晶面が認められない。Ⅳa 類型とⅣb 類型の区分は角閃石の量により行なったものであり、Ⅱ類型のように多くは認められない。

前期河道跡、河道跡の砂粒：礫については前期河道跡と河道跡の試料では若干の違いが認められたが、2mm以下の砂粒では違いが認められない。

構成砂礫種は花崗岩、閃緑岩、斑礫岩、変輝緑岩、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃石である。花崗岩、石英、長石、黒雲母、角閃石は全ての試料に認められる。花崗岩は灰白色、灰色、角礫である。粒径は0.5mm~2mmである。量は僅か~多いである。造岩鉱物は石英・長石、石英・長石・黒雲母である。角閃石は灰色、角礫である。粒径は0.5mm~1mm、量がごく僅かである。造岩鉱物は石英・角閃石、長石・角閃石である。斑礫岩は黒色、角礫である。粒径は0.5mm~2mm、量がごく僅かである。造岩鉱物は長石・角閃石である。変輝緑岩は暗灰色、亜円礫である。粒径は0.5mm~2.5mm、量がごく僅かである。造岩鉱物は長石、細粒の柱状角閃石である。火山ガラスは黒色透明、貝殻状である。石英は無色透明、角礫である。粒径は0.2mm~2mm、量が多い。長石は白色、角礫である。粒径は0.2mm~2mm、量が中である。黒雲母は金色、粒状、板状、六角形柱状である。粒径は0.2mm~1mm、量が僅かである。角閃石は黒色、粒状・柱状の角礫である。粒径は0.2mm~1mm、量が僅かである。細粒の角閃石に結晶面が認められるものもある。

砂礫の採取地

当遺跡から近距離で得られる土器胎土の砂礫構成と同じ砂礫の分布地を求める。

当遺跡の河道跡の砂礫は、碎屑岩類が含まれず、花崗岩、石英、長石、黒雲母、角閃石等が含まれ、角閃石は僅かで、結晶面が認められるものがある。

I a 類型と I b 類型とは、実体鏡下で石英粒に粗粒と細粒の明瞭な差があるか否かによって区分したのみであり、砂礫種構成には差異が認められない。河道跡から採取した砂礫種構成と酷似する。

II 類型には角閃石が多く含まれるが、II a 類型は裸眼で比較的多く認められ、II b 類型は実体鏡下で多く認められる。II a 類型と酷似する砂礫構成をもつ土器が生駒山地西麓付近に出土する土器の多くに見られる。

III a 類型はチャートが比較的多く含まれ、砂岩等も含まれる。チャートの粒形は亜角礫、亜円礫であることから、羽曳野丘陵を中心とした南河内、泉北付近の砂礫である可能性が高い。

III b 類型は僅かにチャートが含まれ、石英に結晶面が認められる場合があることから、現在の初瀬川の砂礫種構成に酷似する。

IV 類型は I 類型と砂礫構成が類似するが、角閃石に結晶面が認められない。観察時、結晶面が認められる角閃石は非常に少ないことから、土器表面の観察条件により認められなかった場合も十分にあり得ることである。河道跡の砂礫であろうか？

以上のことから、砂礫の採取地付近が土器の製作地であるとするならば、I 類型、III b 類型に属する土器は遺跡で、又は遺跡近くで製作されたと推定され、II a 類型は生駒山地西麓付近から、III a 類型は羽曳野丘陵周辺から運ばれたと推定される。IV 類型の土器は遺跡付近で作られたのであろうか。

(2). 石器

1. 石器の観察 (第18・19区、第8表)

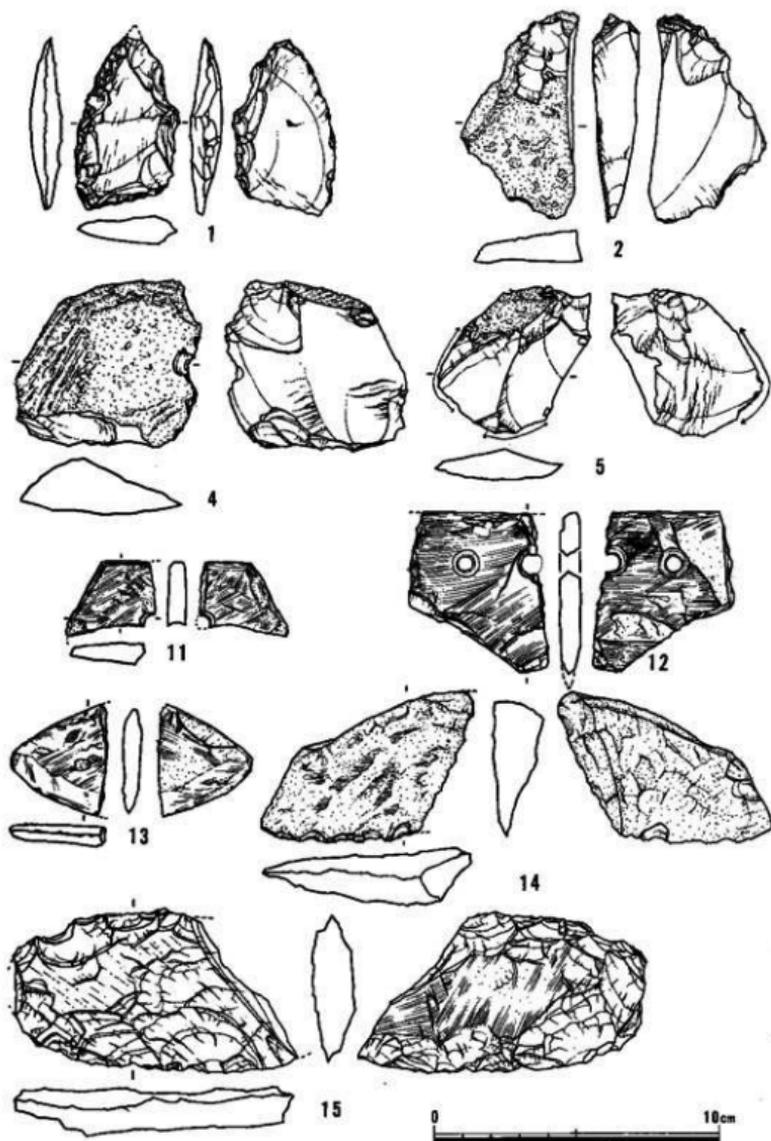
今回の調査で出土した石器は、削器1点、楔形石器の削片2点、石核1点、剥片6点(以上打製石器)、石庖丁3点、同未製品2点、剥片1点、太型蛤刃石斧1点、琢磨痕ある剥片1点(以上磨製石器)の計18点である。それぞれの出土地区、大きさなどの詳細は第8表に示した。

打製石器は全てサヌカイトを石材としている。自然面を残すものの観察によれば、それらは海綿状を呈しており、琢磨痕は全く認められない。岩脈付近、もしくは大阪層群中の自然礫を用いていると考えられる。斑晶はほとんど含まれていない。また剥片類には、使用痕と推察される微細剝離痕が認められるものがある(5・7・8・9)。

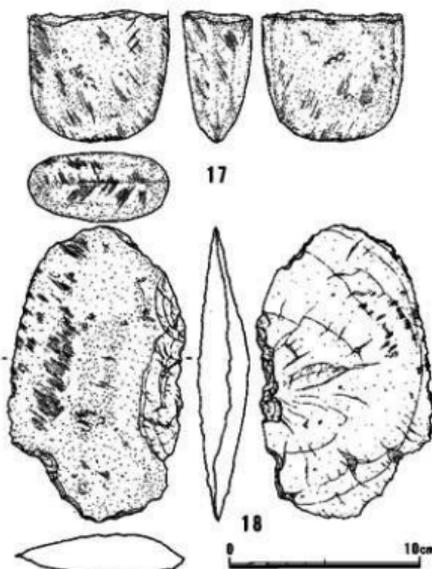
磨製石器では、石庖丁に関係する遺物は全て流紋岩を石材としている。流紋岩製石庖丁については、唐古・鍵遺跡第16次調査で多量の未成品が出土しており、その製作工程の一端も明らかにされているが、本遺跡で検出された石庖丁関連資料も、唐古・鍵遺跡で示された製作工程と矛盾して^①おらず、ほぼ同様な技術で作られたものと考えられる。16の剥片は未成品の形態調整の際に剝離されたものと考えられる。これらの石庖丁は弥生時代前期に盛用されている。

なお、琢磨痕ある剥片が1点出土している。その石材と厚さから見て、扁平片刃などの石斧の未成品とも思われるが、そのまま使用した可能性も考えられる。

注① 田原本町埋蔵文化財調査概要2 『唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報』 Pp. 14-19



第10图 石器实测图1 (S=1/2)



第19図 石器実測図2 (S=3/4)

第8表 石器観察表

No.	器種	大 き さ (mm)			観 察 事 項	出 土 地 区
		最大長 (現存)	最大幅 (現存)	最大厚 (現存)		
1	削 器	61.7	36.8	10.9	剥片素材。背面左側縁及び下端に認められる割痕加工は、縁削 器で強く鋭く施されている。背面右側の割痕加工は、背縁部 に交互に強く鋭く施されている。	包含層
2	楔形石器の削片	73.3	41.0	16.2	剥片素材。上部にのみつぶれ状の加工が認められる。自然面 には割痕は認められない。	SD-02 E20-23
3	楔形石器の削片	35.4	12.9	9.5	上下両縁につぶれ状の加工が認められる。	SD-01 北端黒粘
4	石 核	60.0	70.8	24.0	割片素材。背面左側の背縁部を打刃としている。割痕は石核に 対し半周角。自然面に割痕は認められない。	西端包含層
5	剥 片	54.8	56.4	17.1	両側面打刃。両面の割痕は全てネガティブ。自然面に割痕は 認められない。縁部に焼痕の痕跡あり。	E13地点第6層
6	剥 片	47.9	37.1	5.1	自然面打刃。背面は一枚のネガティブを割痕面。自然面に割痕 は認められない。	SD-02 E20-23
7	剥 片	21.2	38.0	4.9	両面打刃。縁部の割痕の一部に焼痕の痕跡が連続して認めら れる。背面は一枚のネガティブを割痕面。縁部の割痕の 一部に焼痕の痕跡が連続して認められる。	SD-02 第2層黒粘
8	剥 片	38.6	20.5	2.2	自然面打刃。背面は一枚のネガティブを割痕面。縁部の割痕の 一部に焼痕の痕跡が連続して認められる。背面は一枚のネガティブを割痕面。 縁部の割痕の一部に焼痕の痕跡が連続して認められる。	SD-02 第2層黒粘
9	剥 片	26.1	26.4	2.8	自然面打刃。背面は一枚のネガティブを割痕面。縁部の割痕の 一部に焼痕の痕跡が連続して認められる。	SK-01
10	剥 片	35.8	21.4	11.3	両面打刃。背面に自然面を一部残すが、割痕は認められない。	SD-02 E20-21
11	石 磨 丁	27.2	32.2	70.0	石質は軟手組。左側左側縁は縁部を残しているが、削片素材の割 痕面を欠している。	前期河道上層砂層
12	石 磨 丁	57.2	50.0	80.1	石質は軟手組。右側下縁を片刃に研ぎだしている。	SD-02 黒粘
13	石 磨 丁	39.7	33.8	6.5	石質は硬手組。両刃であるが、刃縁付近は常に鋭く両面を研ぎ だしている。	SD-02 第2層黒粘
14	石磨丁 未成品	52.6	80.0	21.9	石質は軟手組。右側中央に若干層層が認められる。縁部には割 痕の痕跡が認められる。	包含層
15	石磨丁 未成品	58.2	111.4	15.8	石質は軟手組。両面を打刃調整した後、右側中央に厚層を残 している。	SD-02 中央地区
16	剥 片	29.3	46.2	7.7	打刃部には魚鱗状の痕跡と段状の割痕が連続して認められる。	SD-02 E20-21
17	大型給刃石斧	69.1	73.8	36.7	右側中央には使用によると推定されるつぶれが認められる。	SD-02
18	琢磨痕ある剥片	155.5	92.2	21.2	縁部の打刃部に打刃調整を残している。縁部付近の両面に琢磨 痕が認められる。	SD-02

2. 石器の岩石種

石器及び石片の岩石を肉眼で観察した。岩石種は玢岩、流紋岩、輝石安山岩、橄欖石輝石安山岩である。玢岩は石斧に、流紋岩は石包丁に、輝石安山岩は石鏃に使用されている。

各岩石種の特徴について述べる。

流紋岩：色は灰白色、黄土灰色である。流理は顕著な場合、ほとんど認められない場合がある。発泡孔は認められる場合が多い。孔形は球状をなす場合が多く、不定形な場合もある。孔径は0.5 mm～1.5 mm、量が僅かである。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母、柎榴石である。石英は無色透明、自形、粒径が0.2 mm～1 mm、量のごく僅か～中である。長石は無色透明、自形、粒径が0.2 mm～0.5 mm、量の中の場合が多く、多い場合、僅かの場合がある。黒雲母は黒色、六角形板状、粒径が0.5 mm～1 mm、量のごくごく僅か～僅かの場合、全く認められない場合がある。柎榴石は濃赤色透明、偏菱二十四面体で、粒径が1 mm～1.5 mm、量のごくごく僅かか認められない場合がある。石基は黄土灰色、灰色で、やや玻璃質で固い。

玢岩：色は暗緑色である。不定形の孔のごく僅かに認められる。孔径は1 mm～3 mmである。捕獲品の石英が認められる場合がある。粒径は3 mm～6 mm、量のごく僅かである。造岩鉱物は長石、黒雲母、角閃石である。長石は無色透明、自形、粒径が1 mm～3 mmの場合、0.2 mm～0.5 mmの場合があり、量の中である。黒雲母は黒色、六角形板状、粒径が0.2 mm～0.5 mm、量の中である。認められない試料がある。角閃石は黒色、柱状の自形、粒径が0.5 mm～2 mm、量の中かごくごく僅かである。石基は緑色、やや玻璃質で固い。

輝石安山岩：色は黒色である。風化面は灰色で半球状の孔があり流理の方向が認められる。捕獲品として石英が含まれる場合がある。粒径は1 mm、量のごくごく僅かである。造岩鉱物は長石、輝石である。長石は無色透明、短柱状、粒径が0.2 mm～1 mm、量の中～多いである。輝石は黒色、柱状、粒径が0.2 mm、量のごくごく僅かである。石基は黒色、玻璃質で固い。

橄欖石輝石安山岩：色は黒色である。造岩鉱物は長石、輝石、橄欖石である。長石は無色透明、短柱状、粒径が0.2 mm～1 mm、量が多い。輝石は黒色、短柱状、粒径が0.2 mm、量のごくごく僅かである。橄欖石は淡黄褐色透明、粒径が0.2 mm、量のごくごく僅かである。石基は黒色、玻璃質で固い。

岩石種毎に、田原本町多を中心として、近距離で求められる地域を推定する。

流紋岩は流理が顕著な場合が多く、造岩鉱物が細粒で、柎榴石、黒雲母のごくごく僅かに認められる場合もあることから、橿原市耳成山に分布する流紋岩の岩相に酷似する。

輝石安山岩は表面に自然に風化した半球状の孔や流理方向に沿った線が認められることから、礫層中の礫や川原石を採取したと推定される。造岩鉱物が細粒で、輝石のごくごく僅かであり、石基が黒色玻璃質であることから、二上山西方ドンズルポー付近を中心に分布する大阪群中に礫として含まれる輝石安山岩礫の一部に酷似する。礫は地層から流出して、田尻川、逢坂川、飛

第9表 石材観察表

試料番号	岩 石 種 別	夾 石	黒 雲 母	角 閃 石	輝 石	綠 礫 石	拓 層 石	石 膏 の 色 補 強 品	備 考
1	輝石安山岩	0.2mm~0.5mm 多い			0.2mm ごく僅か			黒色 石英	流理あり
2	輝石安山岩	0.2mm~0.5mm 中			0.2mm ごくごく僅か			黒色 石英	
3	橄輝石輝石 安山岩	0.2mm~1mm 多い			0.2mm ごくごく僅か	0.2mm ごくごく僅か		黒色	
4	輝石安山岩	0.2mm~0.5mm 中			0.2mm ごくごく僅か			黒色	
5	輝石安山岩	0.2mm~0.5mm 多い			0.2mm ごくごく僅か			黒色	
6	輝石安山岩	0.5mm 中			0.2mm ごくごく僅か			黒色	
7	輝石安山岩	0.2mm~0.5mm 多い			0.2mm ごくごく僅か			黒色	
8	輝石安山岩	0.2mm 中			0.2mm ごくごく僅か			黒色	
9	輝石安山岩	0.2mm~0.5mm 多い			0.2mm ごくごく僅か			黒色	
10	輝石安山岩	0.2mm~1mm 中			0.2mm ごくごく僅か			黒色	
11	流紋岩	0.2mm~0.5mm 僅か						灰白色	
12	流紋岩	0.5mm 中	0.5mm~1mm 僅か				1mm ごくごく僅か	黄土 発泡孔あり	流理が顕著 発泡孔あり
13	流紋岩	0.5mm 中	0.5mm~1mm 僅か				1mm ごくごく僅か	黄土 発泡孔あり	流理が顕著 発泡孔あり
14	流紋岩	0.5mm~1mm 僅か	1mm ごく僅か					灰色	流理がある 発泡孔僅か
15	流紋岩	0.2mm ごく僅か	0.5mm ごくごく僅か					灰白色	流理がある 発泡孔あり
16	流紋岩	0.5mm~1mm 僅か	1mm ごくごく僅か				1mm~1.5mm ごくごく僅か	灰白色	発泡孔あり
17	珩 岩	1mm~3mm 中		0.5mm~2mm 中				灰緑色	孔あり
18	珩 岩	0.2mm~0.5mm 中	0.2mm~0.5mm 中	0.5mm ごくごく僅か				暗緑色 石英	孔あり

鳥川等にも分布する。

橄欖石輝石安山岩は黒色、玻璃質で、造岩鉱物が細粒で、輝石、橄欖石がごくごく僅かであることから、柏原市芝山頂上部に分布する橄欖石輝石安山岩の岩相に酷似する。この岩石は大和川へも僅かに流出している。

珉岩は、岩脈として分布することから推定しがたい。

以上のことから、石器等の石材は、ドンズルポー付近、芝山付近、耳成山付近から採取されたと推定される。

第 3 節 第 7 次調査のまとめ

1. 遺構

今回の調査で検出した遺構は弥生時代前期のものが大半である。遺構の種類としては、小溝・土坑などがあるが、その性格はおさえられない。そこで、多遺跡全体から遺構をとらえてみたい。多遺跡の調査は 9 次調査まで進展しているが、その内容については不明な点が多々あり、言及できない。しかし、おおよそ、現在の多神社から西側にかけて、前期以降の居住区があったと遺物・遺構から推定される。この地区では前期の中段階からの土器が出土しており、ムラ内部にあって最も古く、中心的な地区であろう。このほかの地区で前期の土器等を検出した地点としてあげられるのが、第 5・7・9 次調査である。これらの調査地点は多神社の東方・南方にあたり、50m～500m も離れている。第 5・7 次調査では第 I 様式新段階以降と考えられ、多神社の中心的な地区に比べ、周辺的な地区として捉えることができよう。本遺跡での第 I 様式の南限を示す環濠は不明であるが、これらの周辺的な地区は環濠外になる可能性が高い。第 7 次調査では弥生前期の自然河道を検出しており、ムラの南限地域は河道が形成されるような微凹地となっていたと考えられる。さらに、この河道が埋没するにつれて、人々がムラの南端にも足を踏み入れるようになったと思われる。

このように、今回の第 7 次調査において、多弥生ムラの南端の様相をおさえることができたことは重要な成果となった。

2. 遺物

(1). 土器について

今回検出した土器は、弥生前期の土器が大半であった。遺構的にはあまりめぐまれていなかったため、良好な出土状況を示すものも少ない。このような土器の中で、比較的、まとまった資料としては、SD-02 溝出土土器がある。これらの資料は第 I 様式の終末の様相を示しているようである。壺では口縁部を大きく開く大形のものや壺や甕の無文化傾向がみられ、新段階のものか

ら一つ下る資料となろう。

また、土器の産地同定については奥田氏の分析に詳しく述べられているが、弥生前期段階の土器の搬入は生駒山地西麓産3点、和泉産1点のみであって、同遺跡への搬入はほとんどおこなわれておらず、本遺跡周辺で生産・消費していることが判明した。今後、時期的な変遷を追う必要が生じてきた。

(2) 石庖丁について

第7次調査において出土した石器の中で、特に注目されるのが、耳成山で産出される流紋岩で製作された石庖丁である。石庖丁の製品3点、同未成品2点、剥片1点があり、これらは一部包含層から出土したものもあるが、弥生時代前期の所産のものと考えられる。

石材の採用にあたっては多遺跡の南西約3kmにある耳成山であり、このことは前期段階にあつては、遠隔地の紀ノ川流域産の石材が利用されず、盆地内で石材の採取、生産がおこなわれ、一地域内で完結していたと考えられよう。この流紋岩製の石庖丁は唐古・鍵遺跡や坪井遺跡でも出土していることから、盆地の南半部が、その中心的な流通地域と考えられる。しかし、弥生前期の発掘例が少ないことから、その流通地区はさらに広がるであろう。

次に石庖丁の製作過程であるが、今回は2点の未成品が出土している。これらは形態調整後の琢磨がみられ、製品の一段階前の資料である。また、剥片も出土していることから、本遺跡では第2段階の素材剥片に調整剝離を施し、器形を整える段階が存在したといえるだろう。しかし、原石等を確認していない為、どのような形で遺跡に持ち込まれたかは推定しがたい。ただ、唐古・鍵遺跡においては、原石から製品までの一連の資料があり、拠点集落では石材の採集から製作まで完結していたと考えられる。

以上のように、弥生前期の段階にあつては土器、石器等において物品の移動は小規模であり、遺跡内で自己完結する面が多くあったと考えられる。しかし、多遺跡の弥生ムラが弥生前期から古墳時代まで続く大集落であっても、その規模は唐古・鍵ムラや坪井ムラに比らべ、小さく中規模なムラと思われ、それぞれムラの規模と地域性を考慮したムラの復元が必要になってくるであろう。

第 3 章 多遺跡第 8 次調査の成果

第 1 節 調査の契機と経過

多遺跡は飛鳥川沿いに広がる弥生集落の一つであるが、近年、用水路の整備に伴う発掘調査でその一端が明らかにされつつある。しかし、ムラの変遷をおさえるまでには至っていない。本遺跡はまだ、開発の波がおしよせておらず、早い段階に遺跡の明確な範囲確認をおこなうことが重要な課題となっている。

このような情勢の中において、松田至功氏より住宅新築に伴う発掘届が提出された。届出地は多遺跡の南端にあたる地区で、発掘調査は奈良県教育委員会と協議の結果、田原本町教育委員会がおこなうこととなった。

発掘調査は届出者と協議をおこない、申請地の南半でおこなうこととなった。調査は昭和59年9月21日から9月25日までで実働3日の短期間で終了した。当調査地は面積約30㎡で、約0.7mの客土がなされており、バックホーを用い、遺構面まで掘削をおこなった。検出した遺構は土坑、ピット、自然河道である。遺構・遺物などからみるならば、多遺跡の中でも南端に位置し、遺構の希薄な地区といえよう。

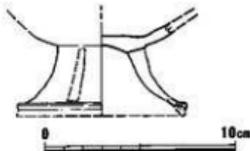
調査日誌抄

- 9月21日 調査地区設定後、機械力をもって客土等を除去し、遺構面の検出をおこなう。地区杭を設定。
- 9月22日 諸遺構を検出し、調査を開始する。遺構を図面作製。
- 9月25日 本日をもって調査を終了し、埋戻しを完了する。

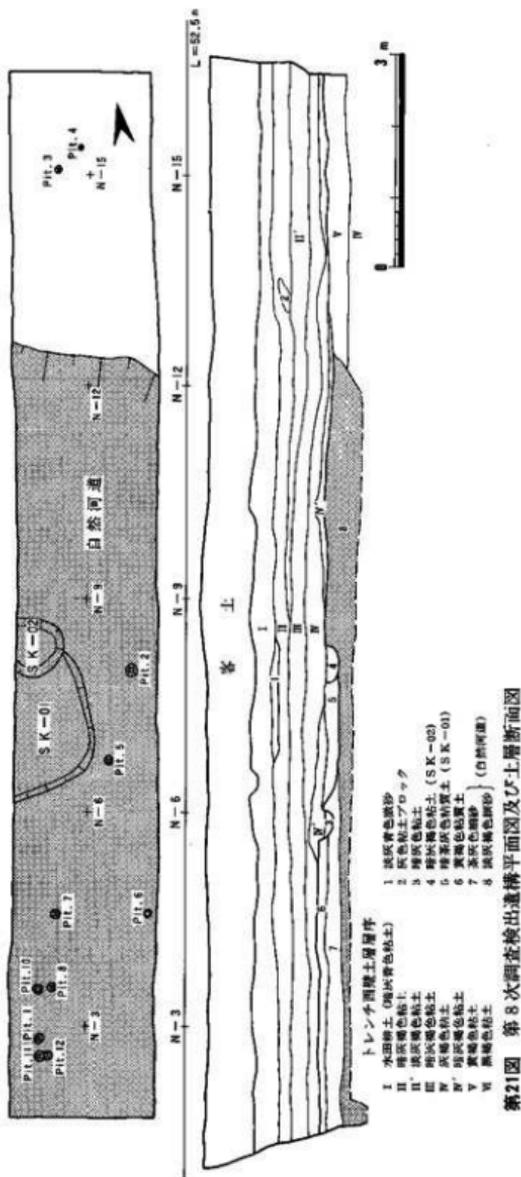
第 2 節 調査の成果

1. 層序

本調査地は均一な土層形成がおこなわれている。本来は水田であった所に約0.7mの客土がなされている。これを除く基本土層は上から第Ⅰ層・暗灰青色粘土（水田耕土）、第Ⅱ層と第Ⅲ層は暗灰褐色粘土であるが、第Ⅲ層は茶斑を多く含有している。第Ⅲ層は須恵器・土師器・陶器片などを包含しており、中世以降に形成されたものであろう。第Ⅳ層は灰褐色粘



第20図 第Ⅲ層出土土器
(S=1/3)



土・第IV層は暗灰褐色粘土で基本的に同質である。第V層・黄褐色粘土でこの層より自然河道が形成されている。また、自然河道の最上層である黄褐色粘質土からはビットや土坑などが掘削されており、遺構面としてとらえられるものである。第VI層は黒褐色粘土で第7次調査においても検出したベース層で広く遺跡地を覆っている。

2. 遺構と遺物

SK-01土坑

トレンチ中央で検出した土坑である。平面プランは調査区域外に広がるため、不明であるが、隅丸方形を呈すると思われる。推定長軸2.2m、同短軸1.5m以上、深さ0.2mの浅い土坑である。自然河道上に掘削されている。埋土は暗茶褐色粘質土である。遺物は弥生土器(時期不明)3片である。

SK-02土坑

SK-01の北側で検出した土坑である。SK-01を切っている。径約0.8mの円形プランで、深さは0.2m

を有する。埋土は暗灰褐色粘土の単一層で、自然河道上に掘削されている。遺物は土器小片が9片で、時期は決しがたいが、杯身あるいは杯蓋の須恵器が含まれていることから古墳時代以降の土坑であろう。

自然河道

トレンチ南半で検出したもので黄褐色粘土層より形成されている。川幅11m以上を有するもので細砂層をもって埋没している。湧水と壁崩壊の恐れがあるため、深掘りは断念した。遺物は検出してない。形成されたベース層より弥生時代以降のものと考えられよう。

ピット群

トレンチ全体にわたって総計11基のピットを検出した。このうち7基はトレンチ南端に偏っている。径10~20cmの小さなピットで、深さは10cm内外である。遺物は弥生土器の小片が3基のピットから検出している。

第3節 第8次調査のまとめ

本調査は約30㎡という小面積であったが、多遺跡の南部地域の様相を把握できたことは有意義であった。土坑二基と小ピット群は自然河道上に掘削されており、いずれも安定したベース層に遺構がつくられていないことや遺物をほとんど含んでいないことからすれば、遺跡の南端にあたる地区といえよう。また、遺構群の形成時期が定かではないが、長期にわたって形成されたものではなかろうか。

弥生時期の遺構が多神社付近と第9次調査地点に分かれ、今回の調査地点はほぼ中間地点におきえられることから、一つの空白地域になると思われる。第7次・8次で検出した自然河道は寺川、飛鳥川という同じ流域のものであり、ともに長らく微凹地であったと考えられる。

第10表 ピット一覧表

ピット番号	規模(cm)		備考
	径	深度	
ピット-1	14	8	土器小片
ピット-2	18	5	土器小片
ピット-3	11	22	土器小片
ピット-4	8	4	
ピット-5	12	3	
ピット-6	11	15	
ピット-7	12	5	
ピット-8	12	8	
ピット-9	40	22	
ピット-10	13	9	
ピット-11	14	8	
ピット-12	12	4	

第 4 章 自然河道跡の砂礫

1. 資料の分析方法と岩石種

採取試料を $\frac{1}{16}$ mm、2mm、4mm、8mmの篩で水中で篩別した。篩別後、天日で乾燥させ、台ばかりで重量を測定した。各粒径の岩石種・鉱物種を裸眼で識別した。粒径8mm以上の礫については、識別後、各岩石種毎に長径をものさして測定した。量は個数で表わした。粒径8mm未満の粒は多いので、四分法により約50g～100gを取り、全体を代表させた。区分は、非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅かの5段階とした。また、粒形は、角礫、亜角礫、亜円礫、円礫の4段階に区分した。

第11表 砂礫の粒度分布表

試料 \ 粒径(mm)	$\frac{1}{16} \leq < 2$	$2 \leq < 4$	$4 \leq < 8$	$8 \leq$	合計
7次前期河道跡A	875g (84%)	125g (12%)	40g (4%)		1040g (100%)
7次前期河道跡B	345g (59%)	200g (35%)	35g (6%)		580g (100%)
8次河道跡	1060g (71%)	255g (17%)	150g (10%)	35g (2%)	1500g (100%)

試料の粒度組成は第12表に示すようである。第7次調査・前期河道跡の砂礫には粒径8mm以上の礫が認められず、前期河道跡Bの砂礫がAに比べやや粗粒である。第8次調査・河道跡の砂礫は粒径8mm以上の礫が認められ、前2者に比べて、粒径に幅がある。

識別した岩石種は、黒雲母花崗岩A、黒雲母花崗岩B、閃緑岩、斑斨岩、輝石安山岩、変輝緑岩、鉱物種は、石英、長石、黒雲母である。粒径が細くなれば、石英、長石等の鉱物が多くなる。逆に、粒径が粗くなれば黒雲母花崗岩、閃緑岩、斑斨岩等の岩石種が多くなる。第7次調査前期河道跡A・Bの試料は黒雲母花崗岩Bが認められず、粒径2mm以上の礫では岩石種とその量がほぼ同じである。第8次調査河道跡の試料では黒雲母花崗岩B、変輝緑岩が多く含まれる。以上のことから、前期河道跡の砂礫種構成には明白な異いが認められる。

2. 岩石種の特徴

各岩石種の特徴について述べる。

黒雲母花崗岩A：色は灰白色で、亜角礫である。最大礫径は20mmである。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が2mm～7mm、量が多い。長石は白色、淡桃色、粒径が1mm～5mm、量が多い。黒雲母は黒色板状、粒径が0.5mm～1mm、量がごく僅かである。

黒雲母花崗岩B：色は灰色で、亜角礫、亜円礫である。最大礫径は17mmである。造岩鉱物は石

第12表 自然河道の粒度及び礫種一覧表

資料名	第7次調査前期河道A				第7次調査前期河道B				第8次調査自然河道			
	$\frac{1}{16} < 2$	$2 \leq < 4$	$4 \leq < 8$	8 \leq	$\frac{1}{16} < 2$	$2 \leq < 4$	$4 \leq < 8$	8 \leq	$\frac{1}{16} < 2$	$2 \leq < 4$	$4 \leq < 8$	8 \leq
砂石・基岩類	僅か	中	多い		中	中	非常に多い		僅か	僅か	僅か	中
黒雲母花崗岩									僅か	中	中	
閃緑岩		僅か	中			僅か	ごく僅か		ごく僅か			
斑岩		ごく僅か	僅か			ごく僅か	ごく僅か		ごく僅か	ごく僅か		
(輝石安山岩)						1	個					
変閃緑岩		僅か	中		僅か	僅か	ごく僅か			中	多い	中
石英	多い	僅か			中	僅か			多い	僅か	僅か	ごく僅か
長石	僅か	ごく僅か			ごく僅か	ごく僅か			ごく僅か	ごく僅か		
黒雲母	ごく僅か				ごく僅か				僅か			

英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が0.5mm～1.5mm、量が多い。長石は白色、淡桃色、粒径が0.5mm～1.5mm、量が多い。黒雲母は黒色板状、粒径が0.5mm～1mm、量がごく僅かである。

閃緑岩：色は灰色で、亜角礫である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母、角閃石である。石英は無色透明、粒径が1mm～1.5mm、量が僅かである。長石は白色、粒径が1mm～2mm、量が多い。黒雲母は黒色板状、粒径が0.5mm～1mm、量がごく僅かである。角閃石は黒色柱状、粒径が1mm～2mm、量が僅かである。

斑岩：色は暗緑色、暗緑灰色で、亜角礫である。造岩鉱物は長石、角閃石、輝石である。長石は白色、粒径が1mm～2mm、量が僅かである。角閃石は黒色、粒径が0.5mm～2mm、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が1mm～1.5mm、量が僅かである。

輝石安山岩：加工破片である。色は黒色で玻璃質である。造岩鉱物は長石、輝石である。長石は無色透明、短柱状、粒径が0.2mm～0.3mm、量が中である。輝石は黒色柱状、粒径が0.3mm、量がごく僅かである。石基は黒色、玻璃質である。

変閃緑岩：色は灰色、灰緑色で、亜角礫、亜円礫である。最大礫径は19mmである。長石の斑晶が点在するものもある。造岩鉱物は長石、角閃石である。長石は白色、粒径が1.5mm以下、量が多い。斑晶をなす長石は粒径が2mm～2.5mmである。角閃石は黒色柱状、粒径が0.5mm以下、量が僅かである。

3. 分析結果

田原本町多を中心として、現在流れている河川の砂礫種構成と比較する。多の近くには初瀬川、寺川、飛鳥川、曾我川が流れている。初瀬川の砂礫には室生火山岩礫、チャート礫が含まれる。曾我川の砂礫にはチャート礫、圧砕岩類礫が含まれる。寺川・飛鳥川の砂礫にはチャート礫、室

生火山岩礫、圧砕岩類礫が含まれない。飛鳥川流域には変輝緑岩がレンズ状をなして広く分布する。寺川流域では閃緑岩が広く分布する。試料の岩石種構成と現在の河川の砂礫種とを比べれば、第7次調査・前期河道跡の砂礫は寺川の砂礫に類似し、第8次調査・河道跡の砂礫は飛鳥川の砂礫に類似する。初瀬川や曾我川が流出した砂礫ではない。

第 5 章 総 括

多遺跡は奈良県における代表的な拠点的な集落として考えられている。昭和47年の河川改修時にその一端が明らかにされて以来、十数年を経たが、これまでの用水路を中心とする調査で遺跡の中央部を分断し、その内容はわずかながらであるが、明らかにされてきた。遺跡は弥生時代前期から中世に至る長期間継続されており、拠点集落の中ではこのように連続と続く遺跡も少ないであろう。

ところで、今回の二つの調査地点は遺跡の南端にあたり、顕著な遺構・遺物は検出されなかったが、第7次調査では弥生前期末の遺構・遺物がわずかながら検出され、多ムラの一様相を捉えることができた。弥生時代前期段階の多ムラは土器をほとんど自給自足しながら、石材は耳成山、二上山より採集していることがわかった。これは、この時期において、一拠点集落である多ムラの流通範囲が奈良盆地南半部で完結していたことを示すであろう。ただ、今回の調査地点が多ムラの中心部ではなく、多ムラの周辺地区であったことは、今後、ムラの中心部との差異が生じてくるかも知れない。

さて、多ムラはどのように形成されたのであろうか。ムラは第Ⅰ様式の中段階より形成され、発展していったようであるが、当初は環濠ももたず、多神社付近を中心に、第9次調査地点などの小規模なムラが点在していたと考えられる。それらの間には自然河道などの微凹地があったと思われる。その後、河道の埋没、ベース層の安定をもって、ムラは神社付近を核としてムラの拡大が始まったと考えられる。これは弥生時代の前期から中期にかけてであろう。しかし、この多ムラの大きさ（環濠内部）は径約200mで、唐古・鍵ムラのように中期における飛躍的な発展はみられない。また、この規模は弥生時代全期間を通じて同じようであるから、他の拠点集落にみられるような後期段階のムラの再形成も不明であり、他のムラとかなり異質なものを有していたと考えられる。この原因は地域的に交通路の岐点とならないことや地域的な変動を受けにくかったことなどがあげられるのではなかろうか。これは遺物の流通においてもいえるであろう。

今回の調査はムラの南端の小規模なものであったにもかかわらず、多弥生ムラの特徴を捉えられたことは重要な成果であった。しかし、多遺跡に限らず、奈良盆地の弥生遺跡の調査は緒に付いたばかりで、その成果は遅々として進展していないのが実状であろう。これは遺物量の多さと遺構の複雑さに原因があると思われる。しかも、奈良においては土器編年も「土器集成」の段階であり、時期的な遺構の変遷が今一つ把握されていない。今後、各遺跡の内容充実を計っていかなければならないであろう。

土 器 觀 察 表

第7次調査の土器観察表

器種	図面一図版 土器番号	法量	口 頸 部	体 部	底 部	胎土	出土遺構	備 考
壺	10-6 1	口径 10.6	・口縁部は外反し 端部は丸くおさめ る ○外面は不明 ○内面は横位ヘラ ミガキ			Ia	SD-02 E19-28	○茶褐色
壺	10-6 2	口径 12.5 腹径 17.9	・体部より外反し、 端部はやや下方に ふくらみつつ丸く おさめる ○内・外面とも横 位ハケ	・腹部がやや張る と思われる ○内外面とも横位 ヘラミガキ		Ⅱa	SD-02 第2層 黒粘	○灰色 ○下腹部に 黒斑
壺	10-6 3	口径 40.0	・口縁部は大きく 外反し、端部近く でやや内折してお わる・増部は丸く おさめる ○内外面不明			Ⅳa	SD-02 E20-23	○赤褐色
壺	10-6 4	口径 17.4	・やや外反ぎみに たち上がる頸部に 続いて口縁部がゆる やかに外反する ・増部は丸くおさ める・頸部に5条 のヘラ掻き沈線 ○内外面とも横位 ヘラミガキ			Ⅳb	SD-02 E17-19	○茶褐色
壺	10-6 5		・やや外反ぎみに たち上がる頸部に 続いて口縁部がゆる やかに外反する (端部欠失) ・頸部に2条以上 のヘラ掻き沈線 ○外面縦位ハケの 後一部に横位のナ ズ ○内面不明			Ib	SD-02 黒粘	○外面赤褐色 ○内面灰褐色
壺	10-6 6	腹径 28.4		・腹部が張ると思 われる・頸部との 境付近と上腹部に 1条ずつ沈線有 ○外面不明 ○内面中位に指圧 痕		Ia	SD-02	○外面茶灰色 ○内面灰色

器種	図面—図順 土器番号	法量	口 頸 部	体 部	底 部	胎土	出土遺構	備 考
壺	10-8 7	腹径 35.4	・頸部に6条以上のヘラ描き沈線	・下半部が張る ・上腹部にヘラ描き3条の平行沈線と漣弧文。その上方に、1条のヘラ描き沈線 ○外面横位ヘラミガキ ○内面には指圧痕頸部付近に一部ヘラミガキ、ハケ		Ia	SD-02 黒粘	○黄土色 ○下部に黒斑
壺	10-10 8	底径 6.2			・平底 ○外面底部付近縦位、上方横位のハケの上より斜位ヘラミガキ○内面斜位ハケ	Ia	SD-02 第2層 黒粘	○外面茶褐色 ○内面灰白色 ○外面に黒斑
壺	10-10 9	底径 8.0			・突出した平底 ○外面上方は縦位、下方は斜位ヘラミガキ、底部端に指圧痕 ○内面不明	IVa	SD-02 黒粘	○暗茶褐色
壺	10-10 10	底径 8.1			・平底 ○外面端との横付近を指圧した後、一部ヘラケズリその上より、縦位ヘラミガキ	IVa	SD-02 黒粘	○赤褐色
壺	10-10 11	底径 13.0			・下部が広がる平底 ○外面横位及び斜位ヘラミガキ○内面縦位(?)ハケ ○底面ハケにより凹む	Ia	SD-02 黒粘	○暗茶褐色
壺	10-10 12	底径 7.8			・平底 ○側面縦位ハケ○内面不明	Ia	SD-02 E17-19	○茶褐色 ○側面に黒斑
甕 甕	11-10 13	上端部径 4.6		〔笠部〕・上端部が突出し、下方へゆるやかに広がる ○外面上部端に指圧痕、笠部は斜位ヘラミガキ? ○内面不明		IVb	SD-02 E20-23	○灰茶色

器種	図面一図取 土器番号	法量	口 頸 部	体 部	底 部	胎土	出土遺構	備 考
甕	11-9 14	口徑 20.7	・口縁部は外反して大きく開く。端部はヘラにより刻み目が入られる ・口縁部下に1条のヘラ描き沈線 ○外面、口縁屈曲部に指圧痕○内面ハケ?	・長胴型 ○外面縦位ハケの上より横位ハケ ○内面指圧痕の上へ横位ハケ		IIb	SD-02 黒粘	○外面暗茶色 ○内面暗茶褐色 ○外面にスス付着
甕	11-9 15	口徑 23.0 底徑 8.0 器高 20.6	・口縁部は外反して大きく開く・端部には刻み目が入られる・口縁部下に1条のヘラ描き沈線	・長胴型 ○内外面とも縦位ハケ	・平底	IIb	SD-02 黒粘	○外面暗茶色 ○内面暗茶褐色 ○外面にスス付着
甕	11-8 16	口徑 31.6	・口縁部はゆるやかに外反して開く 端部はやや面をもつ・口縁部下に3条のヘラ描き沈線 ○調整不明			Ia	SD-02 E20-23	○赤褐色
甕	11-8 17	口徑 23.6	・口縁部はゆるやかに外反して開く ・端部に刻み目が入られる・口縁部下に2条以上のヘラ描き沈線 ○調整不明			IVb	SD-02 E20-23	○赤褐色
甕	11-9 18	口徑 19.0 底徑 6.8 器高 20.0	・口縁部は外反する・端部には刻み目	・長胴型、下方にすぼまる ○外面斜位ハケ後、下位より斜位ヘラミガキ○内面縦位ハケ	・下端部の広がる平底 ○外面端部に指圧痕	IIb	SD-02 黒粘	○外面暗茶色 ○内面暗茶褐色
甕	11-10 19	底徑 6.1			・平底 ○外面縦位ヘラケズリ○底面ハケにより凹む○内面不明	IVa	SD-02 E20-23	○赤褐色
鉢	11-7 20	口徑 22.8 底徑 6.8 器高 13.2	・斜め上方にのび、端部は面を有する ・口縁部下に5条のヘラ描き沈線	・斜め上方に広がる ○外面縦位ハケ後中位より下横位ヘラミガキ○内面不明	・平底 ○底面、粘土継ぎ痕により高台状になる	IIb	SD-02 黒粘	○茶褐色 ○側面に黒灰
鉢	11-8 21	口徑 19.9 底徑 7.8 器高 12.0	・斜め上方にのび、端部は面を有する	・斜め上方に広がる ○外面縦位ハケ ○内面横位ヘラミガキ	・平底	Ia	SD-02 黒粘	○暗茶褐色

器種	図面一図版 土器番号	法 量	口 頸 部	体 部	底 部	胎土	出土遺構	備 考
壺	12-7 22	口径 18.3 腹径 22.0 底径 5.2 器高 35.7	・頸部は体部より 上方に広がりなが ら立ち上がる・口 縁部は、頸部より 水平近く大きく外 反する・肩部は面 をもち、上・下と もひき出される ・口縁部下面に2 条の沈線を有す ○頸部外面は縦位 ハケの後、3本の 櫛揃平行文 ○口縁部内面横ナゲ	・縦長の球形 ○外面縦位ハケ後 肩部に4本の櫛揃 き平行文、中に 横位ヘラミガキ、 下に縦位ヘラミ ガキ ○内面縦位ハケ	・平底	IVb	SD-02	○赤褐色 ○体部中に 黒斑
壺	12-7 23	口径 13.3 腹径 16.4 底径 6.5 器高 14.1	無頸壺	・球形に近い ・肩部に櫛揃流水 文 ○外面下部に横 位ヘラミガキ ○内面横位ヘラミ ガキ	・突出した平 底	Ib	SD-02	○赤褐色 ○下部部に黒 斑
壺	12-11 24	底径 5.6			・平底 ○外面縦位ヘ ラケズリ、斜 位ヘラミガキ ○内面縦位ハケ	IVa	SD-02	○灰白色 ○肩部から底面 にかけ、内外 面とも黒斑
壺	13-7 25	口径 14.8 腹径 16.6 底径 5.3 器高 20.0	・体部よりゆるや かに外反し、端部 に面をもつ・頸部 に5条のヘラ書き 沈線・口縁部に2 個の穴があげられ ている ○内外面とも横位 ヘラミガキ	・球形 ・肩部に5条のヘ ラ書き沈線 ○外面横位ヘラミ ガキ ○内面不明	・平底	Ia	SD-02 E7-10	○赤褐色 ○体部に黒斑
壺	14-8 26	口径 20.5	・外反して端部を 丸くおさめる ○調整不明			Ia	SK-02	○赤褐色

器種	図面一図版 土器番号	拓影部位	調 整	胎土	出土遺構	備 考
壺	15-6 27	口縁部	外面 横位ナゲ 内面 横位ヘラミガキ 端部 ハケにより面をもたせ その後ヘラによる刻み目	Ia	SD-02	淡黄灰色 断面 茶褐色
壺	15-6 28	頸部	外面 横位ヘラミガキ 内面 上部に横位ヘラミガキ 一条のヘラ書き沈線と二条目 沈線の痕跡	IVa	前期河遺黒粘	暗茶灰色 断面 黒灰色

器種	図面一図版 土器番号	拓影部位	調 整	胎土	出土遺構	備 考
壺	15-6 29	頸部	外面 断面三角形貼り付け突帯 突帯とその上下に横位ナデ 内面 横位ナデ	I a	SD-02 E23-26	外面 暗茶褐色 内面 淡茶褐色
壺	15-6 30	頸部	外面 6条のヘラ描き沈線 その他は不明 内面 不明	Ⅲb	SD-02 E20-23	外面 淡黄灰色 内面 暗黄褐色
壺	15-6 31	頸部	外面 3条のヘラ描き沈線 その他は不明 内面 不明	I a	SD-02 E20-21	淡黄灰色
壺	15-6 32	頸部	外面 2条のヘラ描き沈線 横位ナデ 内面 横位ヘラミガキ	Ⅳb	SD-02	外面 赤褐色 一部暗灰色 内面 淡赤褐色
壺	15-6 33	体部	外面 3条のヘラ描き沈線 横位ヘラミガキ 内面 不明	Ⅱa	包含層 落ち込み上層	暗茶褐色
壺	15-6 34	体部	外面 3条のヘラ描き沈線 内面 ヘラ状工具痕 その他不明	Ⅱa	SK-02	灰茶色
壺	15-6 35	体部	外面 4条のヘラ描き沈線 その他不明 内面 不明	I b	包含層	赤褐色
壺	15-6 36	体部	外面 4条以上のヘラ描き沈線 横位ハケ後横位ヘラミガキ 内面 横位ハケ後横位ヘラミガキ	I a	SD-02 E20-23	暗赤茶色
壺	15-6 37	体部	外面 4条のヘラ描き沈線 横位ハケ後斜位ヘラミガキ 内面 不明	I a	SK-03	灰茶色
壺	15-6 38	体部	外面 3条のヘラ描き沈線 横位ハケ後斜位ヘラミガキ 内面 横位ハケ(?)	I a	包含層	淡黄灰色 一部灰色
壺	15-6 39	体部	外面 4条のヘラ描き沈線 横位ハケ後横位及び 斜位ヘラミガキ 内面 (横位ハケ後?) 横位ヘラミガキ	I b	SD-02 黒粘	淡茶色
壺	15-6 40	体部	外面 3条以上のヘラ描き沈線 横位ハケ後横位ヘラミガキ 内面 横位ハケ	I a	SD-02 黒粘	赤褐色
壺	15-6 41	体部	外面 5条のヘラ描き沈線 横位ハケ後横位ヘラミガキ(?) 内面 不明	I a	包含層 西	外面 灰茶色 赤褐色 内面 淡黄灰色
壺	15-6 42	体部	外面 5条のヘラ描き沈線 横位ヘラミガキ 内面 縦位ヘラミガキ	I a	SD-01 E6-7	外面 淡茶褐色 内面 暗青灰色
壺	15-6 43	体部	外面 5条のヘラ描き沈線 横位ハケ 内面 不明	I a	SD-02 E17-19	外面 茶褐色 内面 淡茶褐色

器種	図面一図版 土器番号	拓影部位	調 整	胎土	出土遺構	備 考	
甕	16-8 44	口縁部一 体部上半	口縁 斜め上方に外反する 端部 刻み目 外面頸部 横位ナデ 体部斜位ハケ部分的に縦位 ヘラミガキ 内面 縦位ハケ(?)	Ia	SD-02 E21-23	外面 茶褐色 内面 淡茶褐色	
甕	16-8 45	口縁部一 体部上位	口縁 斜め上方へ外反 端部 刻み目 外面頸部 横位ハケ 内面 不明	Ib	前期河道 黒粘	淡茶褐色	
甕	16-8 46	口縁部一 体部上位	口縁 ほぼ水平に外反 外面頸部 横位ハケ 体部に4条のヘラ描き沈線 内面 横位ハケ	Ia	SD-01 E 6-7	暗茶褐色 部分的 赤褐色	
甕	16-8 47	口縁部一 体部上半	口縁 ほぼ水平に外反 端部 刻み目 外面 頸部より体部にかけて3 条のヘラ描き沈線 横位ナデ 体部は横位ハケ(?) 内面 斜位ハケ	Ia	SD-02 E 20-21	淡茶褐色	
甕	16-8 48	口縁部一 体部上位	口縁 水平に外反 端部 刻み目 外面 口縁部から頸部横位ナ デ、ヘラ状工具圧痕(?) 頸部から体部上位に5条の ヘラ描き沈線 内面 不明	Ia	SD-01 E 6-7	茶褐色	
甕	16-8 49	口縁部一 頸部	口縁 斜め上方に外反 端部 刻み目 外面 頸部横位ナデ5条のヘ ラ描き沈線 内面 横位ナデ 頸部 縦線	IVb	SD-02 E 17~19	暗赤茶褐色	
甕	16-8 50	口縁部一 体部上半	口縁 斜め上方に外反 端部 刻み目 外面 体部上位3条のヘラ描 き沈線 横位ハケ 内面 不明	Ia	SD-02 第2層 黒粘南端	外面 暗茶褐色 下位にスス付着 内面 赤褐色	
甕	16-8 51	口縁部	口縁 やや斜めに上方に外反 端部 刻み目 外面 横位ナデ 内面 横位ナデ	Ia	SD-02 E20-23	暗茶褐色	
甕	16-8 52	口縁部	口縁 やや斜め上方に外反 端部 刻み目 外・内面 横位ナデ	IVa	落ちこみ E 7-10	外面 淡赤褐色 端部 茶 褐色 内面 淡赤褐色	
器種	図面一図版 土器番号	法 量	口 縁 部	体 部	胎土	出土遺構	備 考
壺蓋	17-10 53	径 7.4	・端部は外面に面をもち、 まるい ○横位ナデ	・二孔・対の孔 ・中央にむかってふくらむ ○内外面不明	Ia	包含層 落ち込み 上層	外面 茶褐色 内面 淡茶褐色 断面 赤褐色

器種	図面一図版 土器番号	法量	口 頸 部	体 部	底 部	胎土	出土遺構	備 考
甕	17-10 54	口径 18.7	・口縁部はなだらかに外反し、端部は面をもつ○内外面横位ヘラミガキ			Ia	包含層 西半	外面 淡茶褐色 内面 淡赤褐色
甕	17-10 55	口径 18.9		・上位に1条のヘラ掻き沈線○外面縦位ハケ部分的に斜位ハケ、工具の痕○内面縦位ハケ		Ia	包含層	外面 暗茶褐色 下位赤褐色 内面 淡茶褐色
甕	17-8 56	口径 24.8	・口縁部はやや斜め上方に外反し、端部に刻み目、面をもっている○外面口縁へ頸部横位ナデ	・上位には4条のヘラ掻き沈線○内外面不明		IVb	第7層セクション	外面 淡茶褐色 内面 淡茶褐色 一部暗茶褐色
甕	17-10 57	口径 6.9		○下位外面縦位ハケ ○内面不明	・平底 ○外面縦位ハケ一部不整ヘラミガキ ○内面不明	Ia	包含層	外面 赤褐色 内面 淡茶褐色
甕	17-10 58	口径 7.8			・平底、中央にわけてわか に凹む ○外面横位ハケ○内面不明	IVa	包含層	外面 淡茶褐色 一部赤褐色 内面 暗赤褐色
甕 土器 (?)	17-10 59	口径 5.3 口径 6.3	・体部よりゆるやかに内反する ○内外面横位ナデ	・球形 ○内外面横位ナデ(?)		—	西端 包含層	内・外面 淡赤褐色
甕	17-10 60	口径 20.9	・頸部より、ゆるやかに外反し、端部内面に面○外面口縁部下に刻突列点文○横位ナデ○内面横位ナデ			Ia	包含層西	内・外面 淡赤褐色

器種	図面一図版 土器番号	法量	杯 部	脚 部	胎土	出土遺構	備 考	
高杯	17-10 61	口径 14.9	・口縁部は、斜め上方へた ちあがったのちに、上縁部 で大きく外反する ・端部は丸い・底部を欠く ○内外面横位ナデ(?)			IVa	西端 包含層	外面 淡茶褐色 内面 暗茶褐色
高杯	17-10 62		・口縁部欠失・底部 ○外面横位ヘラケズリ ○内面不明			IVa	西端 包含層	内・外面 赤褐色
高杯	17-10 63		・口縁部欠失・底部 ○外面縦位ハケ ○内面不明			IIIb	包含層 西半	外面 茶褐色 内面 暗茶褐色

器種	図面—図版 土器番号	法量	杯部	脚部	胎土	出土遺構	備考
高杯	17-10		・口縁部欠失・底部 ○外面縦位ハケ ○内面不明		IVb	西端 包含層	外面 暗赤褐色 内面 暗茶褐色
	64						
高杯	17-10	底径 9.6		・裾部は下方へ大きく外反 ・肩部は面をもち、そこに細い沈線を有す ・外面縦位ヘラミガキ ・内面横位ハケ	IVa	包含層西	外面 淡茶褐色 一部赤褐色 内面 赤褐色
	65						

器種	図面—図版 土器番号	法量	口縁部	体部	胎土	出土遺構	備考
杯蓋	17-10	口径 12.5	・少し外反ぎみにのびる ・端部はすどく、下面に凹みがある ○内外面回転ナデ	・頂部欠失 ・稜はすどい	—	包含層 西平	外面 暗灰色 内面 淡青灰色
	66	口径 12.4					
杯身	17-10	口径 13.4	・たちあがりは、やや内反し、その後まっすぐのびる ・端部まるく内面凹をもつ ○内外面回転ナデ	・底部欠失 ・受部はあまく丸みをもち、斜め上方にのびる ○内外面回転ナデ	—	包含層 西平	外面 淡黄灰色 内面 淡白灰色
	67	受部径 15					
杯身	17-10	口径 10	・たちあがりは、斜め方向に内反し短くすどい ○内外面回転ナデ	・底部欠失・受部は斜め方向に外反し、端部は丸みをもつ ○内外面回転ナデ	—	包含層西	淡白灰色
	68						

器種	図面—図版 土器番号	形状部位	調整	胎土	出土遺構	備考
域輪	17-10	体部(?)	外面斜位ハケ 内面横位ハケ後斜位ハケ	Ib	セクション第5層 E19地点	外面 淡赤褐色 内面 淡茶褐色 断面 灰黒色
	69					
不明	17-10	不明	外面7条のヘラ掻き沈線と、その上下に、鋸歯文(?) 内外面不明	Ib	包含層西	外面 暗黒灰色 一部淡茶褐色 淡赤褐色 内面 暗茶褐色
	70					
器台	17-10	体部(?)	外面長方形スカシ孔の下に稜が2本その上下に、カキ目後、垂縮波状文、 内面回転ナデ	—	包含層西	淡青灰色
	71					

器種	図面—図版 土器番号	法量	口縁部	体部	胎土	出土遺構	備考
壺	—11	—	○内外面ヨコナデ		Ib	SD-01	
	72		○外面ハケ				
壺	—11	—		・内外面ナデ ・外面2条以上のヘラ掻き沈線	IIa	包含層	
	73						

飛鳥川採集土器の観察表

器種	図面一図版 土器番号	法 量	口 頸 部	体 部	底 部	胎土	出土遺構	備 考
壺	4—15 1	腹径 25.8		<ul style="list-style-type: none"> ・上腹部に6本のヘラ抜き沈線 ○外面斜位及び横位ヘラミガキ ○内面縦位のヘラミガキ後横位ヘラミガキ 		Ⅱa	飛鳥川採集	外面 茶褐色 内面 淡灰褐色
甗	4—15 2	口径 17.8	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁外面に明瞭な稜をもつ ○体部にタタキを施した後 頸部、口縁部に強い横位ナデ○内面接合痕を残す 	<ul style="list-style-type: none"> ○外面右斜め方向の強いタタキ ○内面縦位ハケ 		Ⅱb	飛鳥川採集	茶褐色 外面にスス付着
甗	4—15 3	口径 12.8	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁端部に若干面を持つ ・上縁部は体部から屈曲して外側にやや開く ○体部に縦位ハケ後口縁に横位ナデ 	○内面横位ナデ		Ⅱa	飛鳥川採集	淡茶褐色 内外面にスス付着
甗	4—15 4	口径 19.6	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部は体部から屈曲して内湾ぎみに開く ・端部内面に明瞭な段を持つ ○外面ヨコナデ ○内面斜位細かいハケ ○外面端部付近に接合痕 	<ul style="list-style-type: none"> ○外面縦位及び斜位ハケ ○内面縦位のやや荒いハケ ○内面接合痕 		Ⅱa	飛鳥川採集	茶褐色
甗	4—15 5	口径 30.0	<ul style="list-style-type: none"> ・体部からゆるやかに外反する ・端部は若干立ち上がる ○外面横位ナデ、内面は横位ハケ後横位ナデ ○外面に接合痕明瞭 	<ul style="list-style-type: none"> ○外面縦位のハケ(部分的にケズリ) ○内面頸部付近で横位ハケ 以下はナデで消される ○内外面接合痕 		Ⅱa	飛鳥川採集	灰褐色 内外面にスス付着

器種	図面一図版 土器番号	法 量	杯 部	脚 部	胎土	出土遺構	備 考	
高杯	4—15 6	口径 17.1	<ul style="list-style-type: none"> ・端部で若干外反する。 ・杯部下位で屈曲して稜を持つ ○外面は縦位のハケ○内面は斜位ハケ後横位ナデ縦位ミガキ 			Ⅱb	飛鳥川採集	茶褐色

器種	図面一図版 土器番号	法量	杯部	脚部	胎土	出土遺構	備考
高杯	4-15 7	口径 16.8	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁はやや外湾しながら延び、端部付近で若干内湾ぎみになる ○内面及び外面口縁端部付近で横位ナデ ○杯部下位はケズリ ○外面に接合痕 		Ib	飛鳥川採集	淡黄褐色
高杯	4-15 8	口径 18.0	<ul style="list-style-type: none"> ・内面の底付近はややもり上がる ・口縁は端部付近でやや外反する ○内面及び外面上半は横位ナデ後横位ヘラミガキ ○外面下半は横位のケズリ ○外面の一部に光指のある物質が付着する 		Ia	飛鳥川採集	赤褐色
高杯	4-15 9	脚径 10.0		<ul style="list-style-type: none"> ・ややふくらみぎみに広がる柱状部からゆるやかに屈曲して外側へ開く ○脚端部は内外面とも横位ハケ後横位ナデ ○柱状部は外面ナデ後若干の縦位ヘラミガキ ○内面横位ナデしぼり痕 ○柱状部上手の内面に棒状の工具の抜き取り痕 	Ⅱb	飛鳥川採集	外面 暗赤褐色 内面 赤褐色 内外面にススガ付着

器種	図面一図版 土器番号	法量	口頸部	体部	底部	胎土	出土遺構	備考
小形丸底蓋	4-15 10	口径 9 脚径 7.7	<ul style="list-style-type: none"> ・頸部より斜め方向になだらかにのび、端部は丸みをもつ ○端部は内外面横位ナデ ○内外面横位ヘラミガキ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ふっくらとはる ○外面横位ヘラミガキ ○内面横位ナデ 		Ib	飛鳥川採集	淡赤褐色 外面に黒斑

器種	図面一図版 土器番号	法量	口縁部	体部	胎土	出土遺構	備考
杯蓋	4-15 11	口径 13 口径 13.2	<ul style="list-style-type: none"> ・やや内反ぎみにのびた後外反 ・端部はすどく内面に面をもつ ○内外面回転ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・縁はすどく短い ○内外面回転ナデ 	—	飛鳥川採集	暗灰色
杯蓋	4-15 12	口径 15.3 口径 14.4	<ul style="list-style-type: none"> ・やや斜め方向に外反した後まっすくにのびる ・端部はすどく内面に面をもつ ○内外面回転ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・縁はにぶくほとんど突出していない ・縁上部より内反ぎみにつくられる ○外面下位は回転ナデ 上位は横位ヘラケズリ ○内面回転ナデ 	—	飛鳥川採集	外面 暗灰色 内面 淡灰色

器種	図面一図版 土器番号	法量	口 縁 部	体 部	胎土	出土遺構	備 考
杯 身	4-15 13	底径 8.8		<ul style="list-style-type: none"> ・体部そのほとんどを欠失 ・底部に高台がつく ・端部外側はすどい ・高台内側に接合痕がみられる ○内外面回転ナデ 		飛鳥川採集	暗黒灰色 断面 暗茶褐色

器種	図面一図版 土器番号	拓影部位	調 整	胎土	出 土 遺 構	備 考
壺	4-15 14	頸部～体部	<ul style="list-style-type: none"> ・頸部 ケズリ出し突帯 ・外面 横位ヘラミガキ ・内面 横位ヘラミガキ 	Ia	飛鳥川採集	外面 暗赤褐色 内面 灰黒色
壺	4-15 15	体部	<ul style="list-style-type: none"> ・外面 下位にケズリ出し突帯6本 横位ハケ後横位ヘラミガキ ・内面 不明 	Ib	飛鳥川採集	暗赤褐色
壺	4-15 16	体部	<ul style="list-style-type: none"> ・外面 上位に5条のヘラ縞 き沈線 下位に1条のヘラ縞 き沈線 横位ハケ(?) ・内面 横位ハケ 	IVa	飛鳥川採集	外面 淡赤褐色 内面 淡茶褐色 一部淡黒灰色
甕	4-15 17	口縁部～ 体部	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部は、斜め方向にのび 端部は丸く、刻み目を施す ・外面 4条のヘラ縞き沈線 ・口縁部内外面 横位ナデ ・外面 不明 ・内面 横位ハケ 	Ia	飛鳥川採集	淡茶褐色 外面にスス付着
壺	4-15 18	頸部～体部	<ul style="list-style-type: none"> ・外面 縦位ハケ後、8～9 条のクシ縞き直線文2条を施し、 その下位に平裁竹管による 斜格子文 ・内面 縦位ハケ 	Ia	飛鳥川採集	淡赤褐色

☒

版



図版1 多遺跡全景（航空写真・西方から）



a. 遺構検出状況



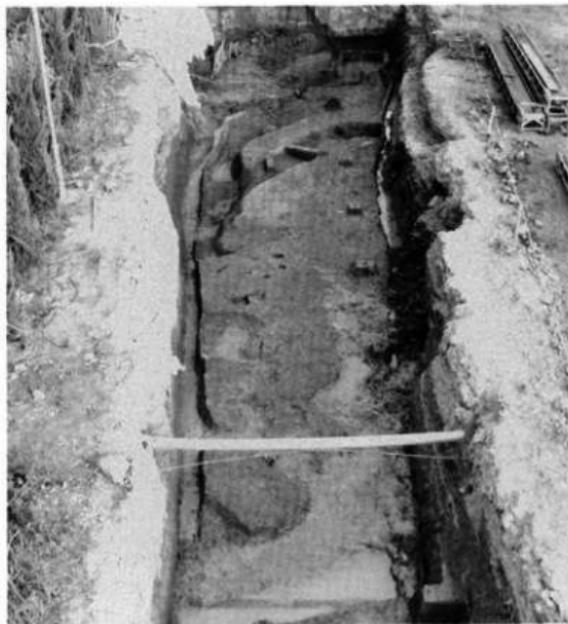
b. SD-02溝 完掘状況



a. SD-02溝 遺物出土状況



b. SD-02溝 壺出土状況



a 遺構完掘状況 西から



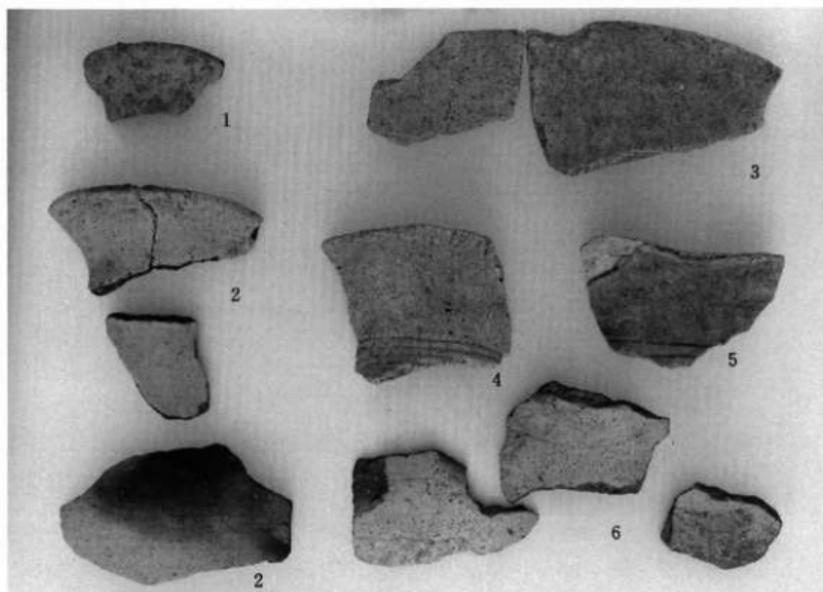
b. トレンチ西半ピット完掘状況



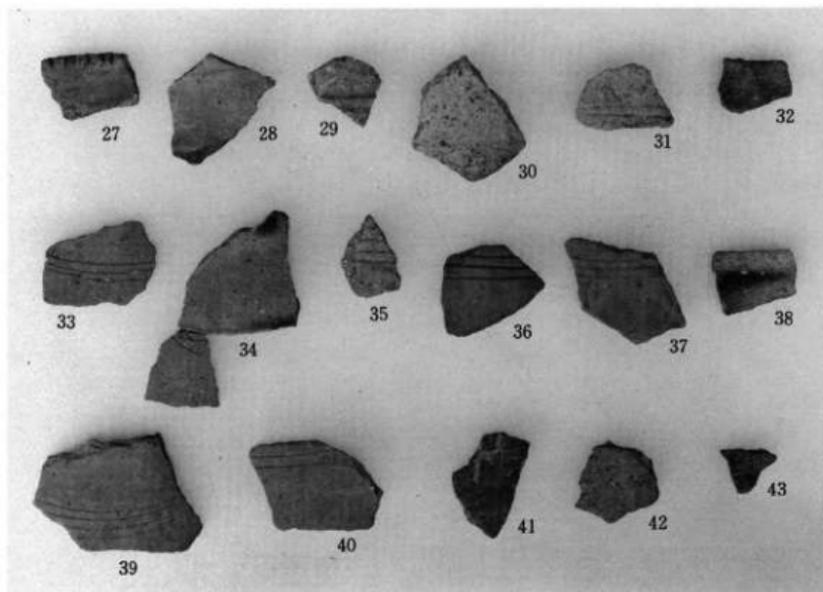
a. SD-01溝 完掘状況



b. 落ち込み状遺構完掘状況



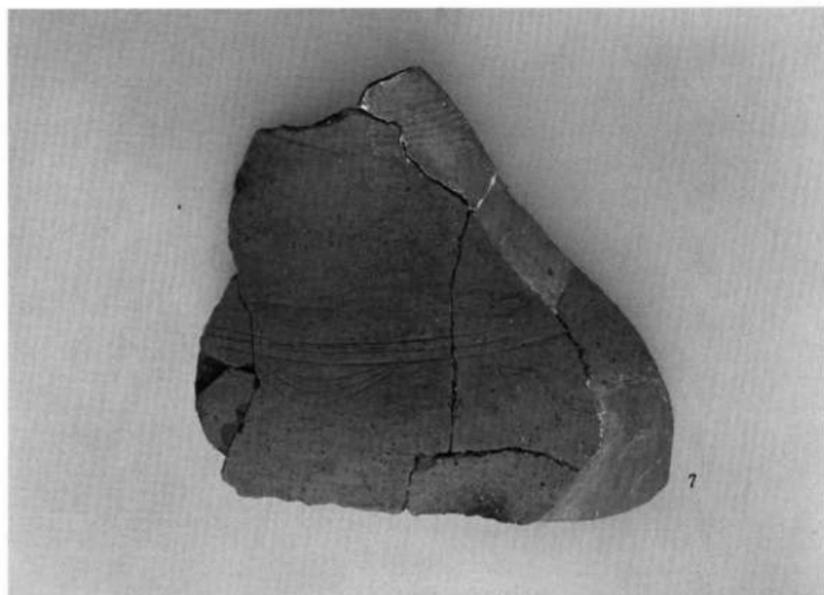
a. SD-02溝 出土壺(1・2・3・4・5・6) S=1/2



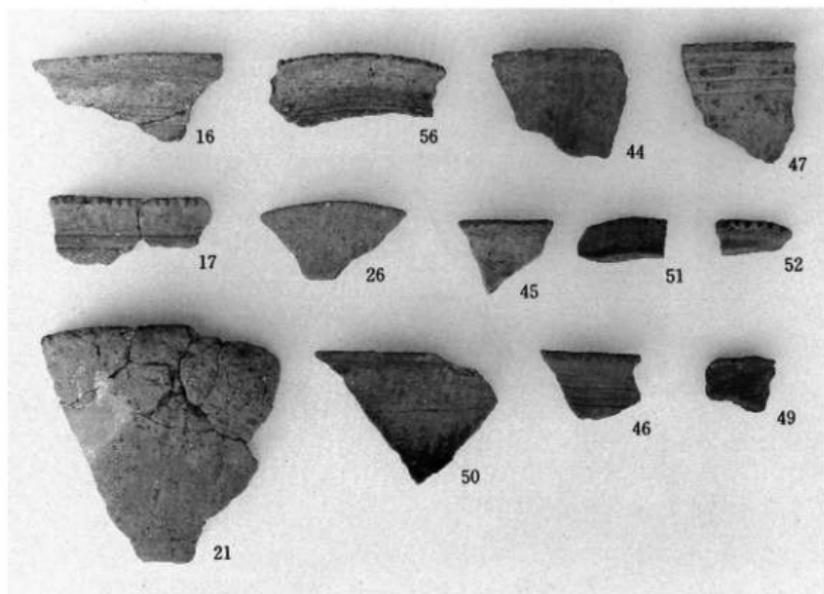
b. 壺口縁部(27), 壺胴部文様(28~43) S=1/2



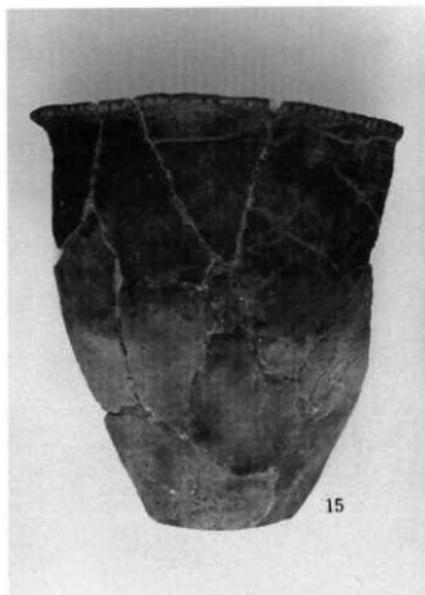
SD-02溝 出土土器(20・22・23), 落ち込み状遺構出土土壺(25) S=1/4



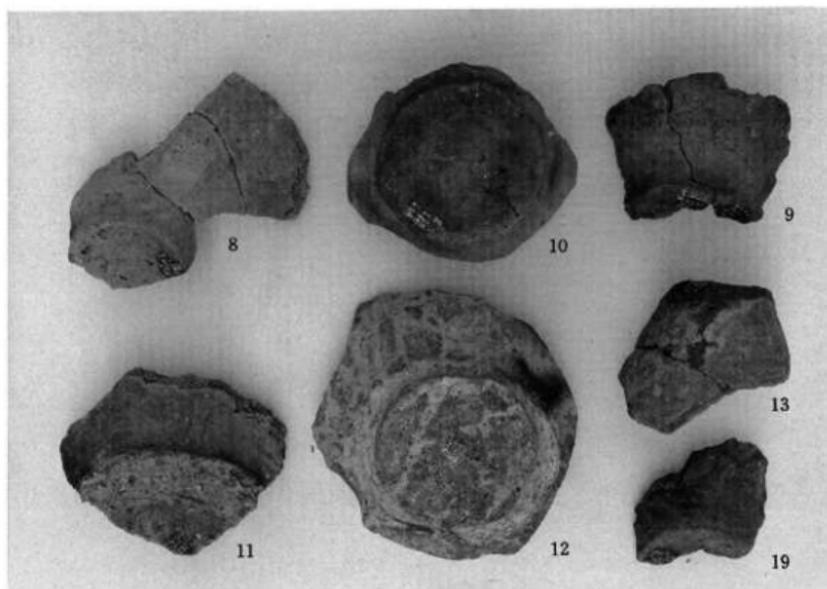
a. SD-02溝 出土壺 S=1/5



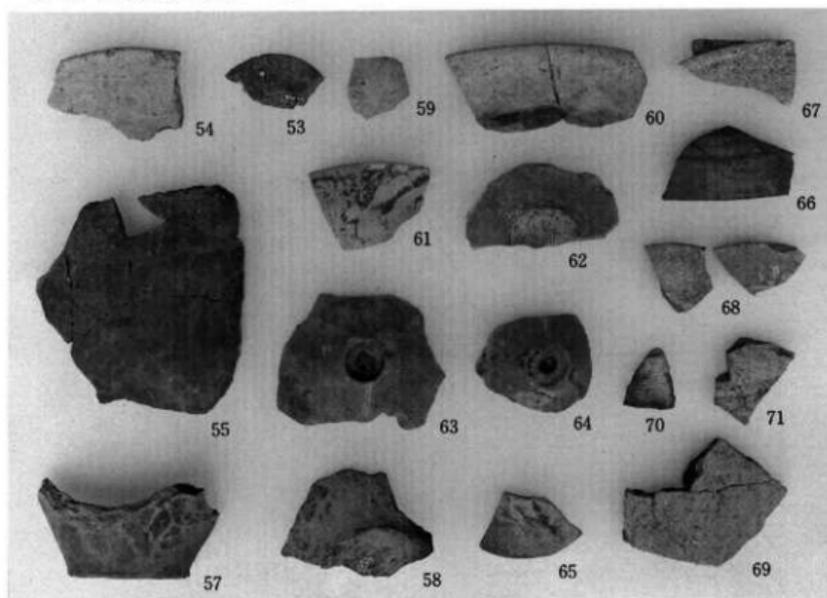
b. 甕(16・17・44・45・46・47・49・50・51・52) 壺(26) 鉢(21) S=1/5



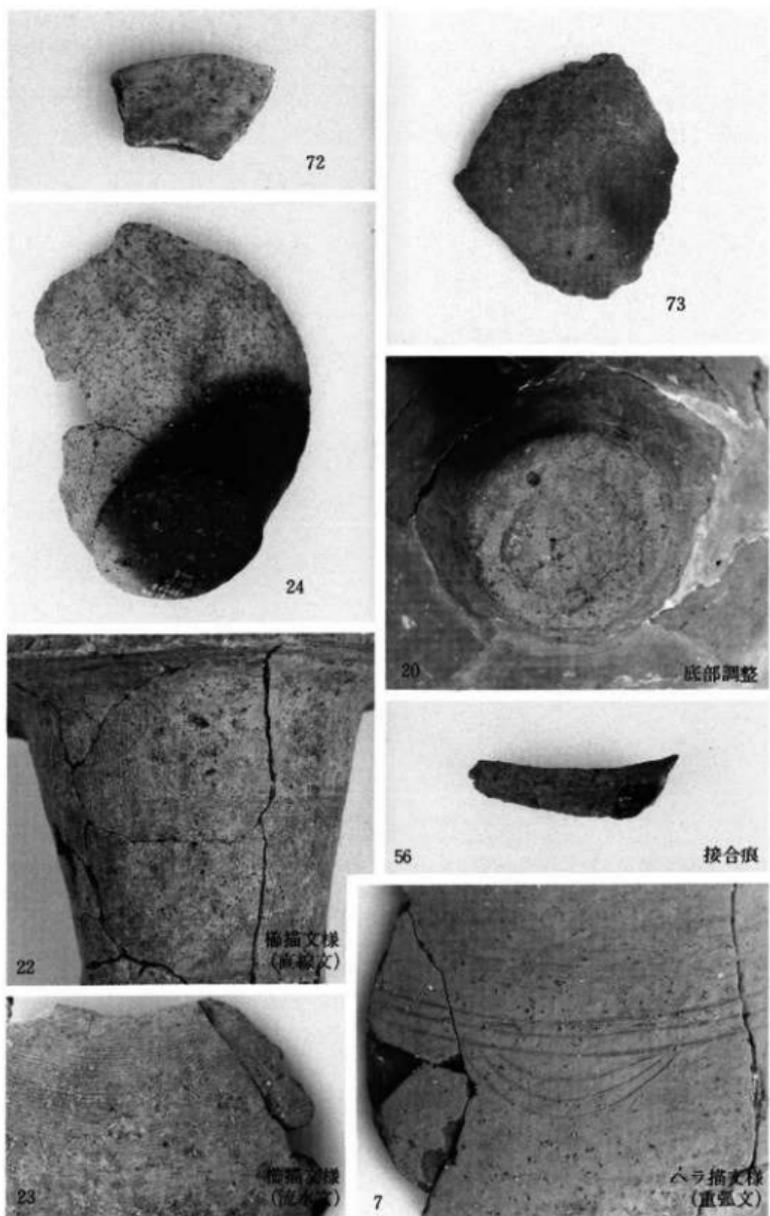
SD-02溝 出土 甕(14・15・18) S=1/2



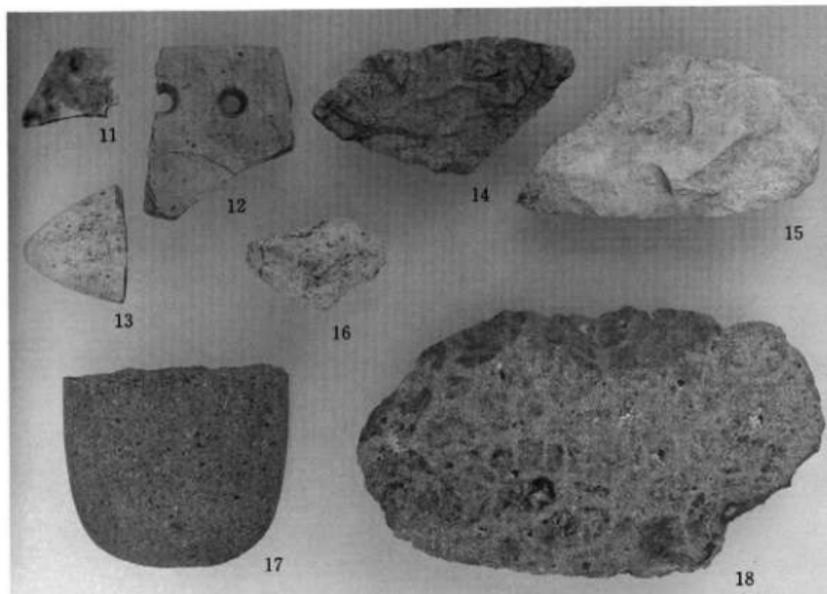
a. 壺・甕底部及び壺蓋 S=1/4



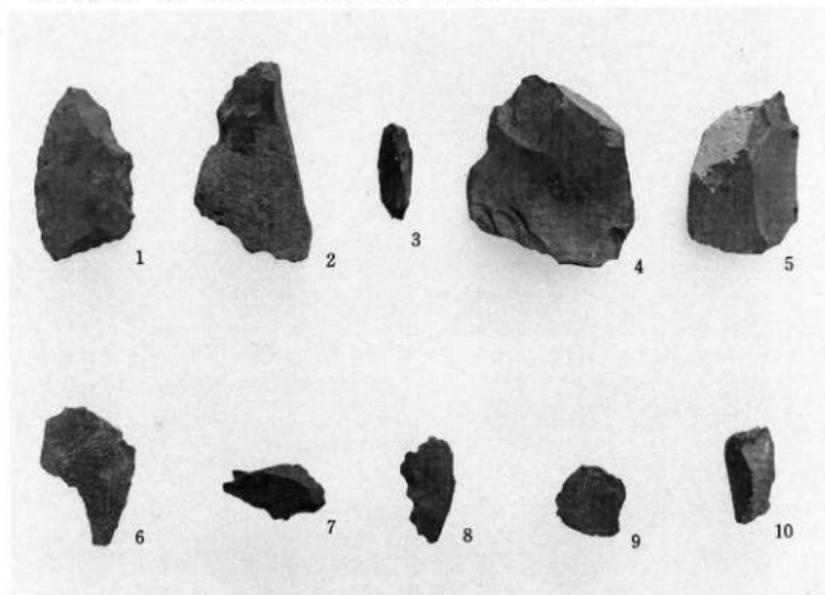
b. 包含層出土土器 S=1/4



SD-02溝 出土壺(72), 包含層出土壺(73), SD-02出土甕(24), 及び各種文様・調整



a. 石庖丁(11~13), 同未成品(14・15), 同剝片(16), 石斧(17), 剝片(18) S=½



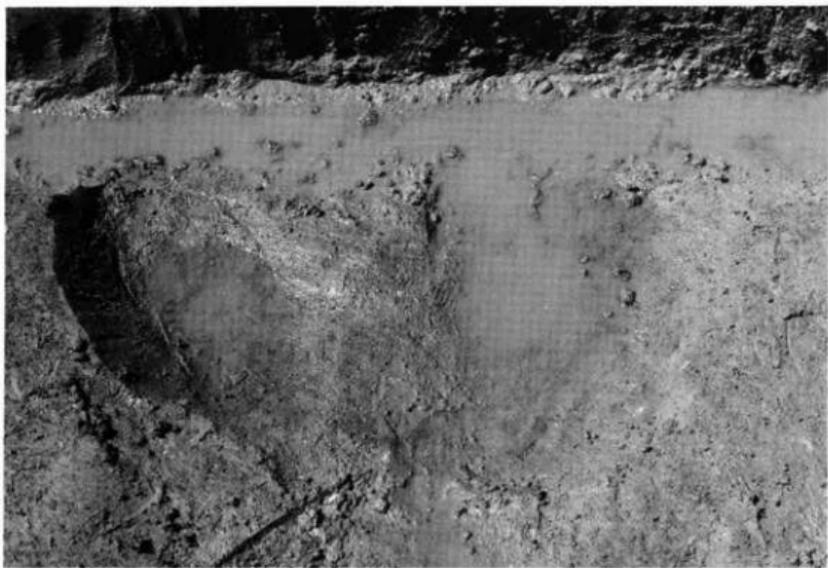
b. 打製石器 削器(1), 楔形石器の削片(2・3), 石核(4), 剝片(5~10) S=½



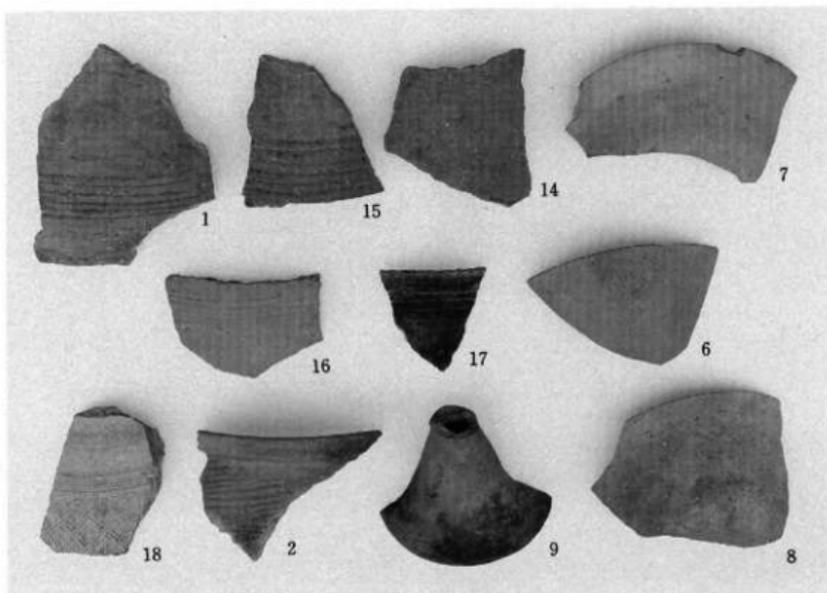
a. 遺構検出状況（南から）



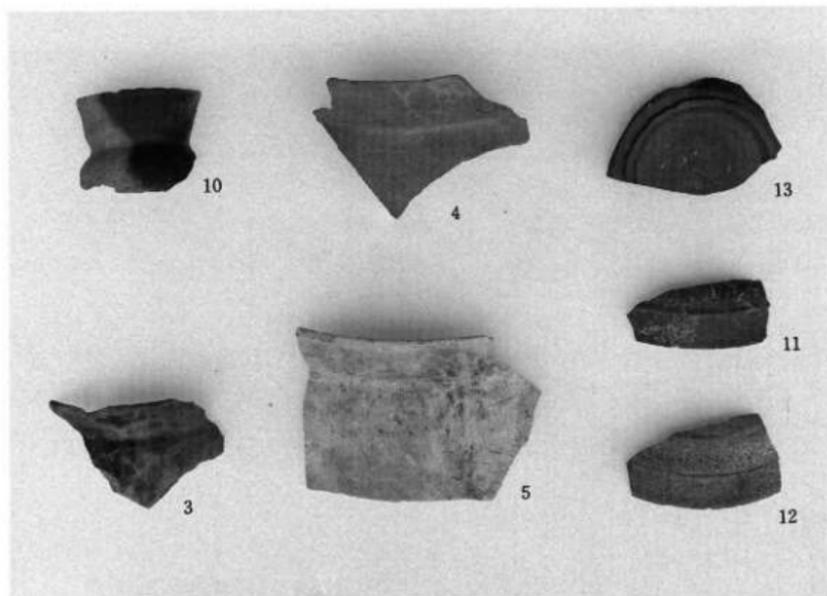
b. 遺構完掘状況（北から）



c. SK-01, 02 完掘状況



a. 弥生土器(1・2・14・15・16・17・18), 土師器(6・7・8・9)



b. 土師器(3・4・5・10), 須恵器(11・12・13)

田原本町文化財調査報告書第1集

多遺跡発掘調査報告

—第7・8次調査—

昭和60年3月31日

発行 田原本町教育委員会

印刷 関西美術印刷株式会社